
SAVERS

ひかりの雷斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAVERS

【Nコード】

N4262F

【作者名】

ひかりの雷斗

【あらすじ】

デジタルワールドと人間界、二つの危機を同時に救った少年少女達の物語『デジモンセイバーズ』。が、新たな事件の波紋は既に広がりはじめていた――。オリジナル主人公とおなじみのキャラクター達が織り成す最終決戦、此処に開幕！

ep.01:第一話(1/4)「少年と事件」(前書き)

第一話

新たな幕開け！ サラマンダモンの炎

ep.01：第一話（1 / 4）「少年と事件」

記憶の中にあるその場所は、火の手が行く手を阻むような火炎の中だった気がする。

今となつては情景を思い出す事すら不可能なほどの遠い記憶、思いだせないのも仕方ないのかもしれない。

けれど、それでもあの頃から逃^{のが}れられない彼にとって、どれほど鮮明さが失われていてもそれは重要で有益な情報の一つだった。逆について言えば、彼には今も手がかりはそれしかないのだ。

——己が持つ、おぼろげな記憶。

十五年前、彼が三歳の時に起きた事件である。

SAVERS 第一話（1 / 4）

少年と事件

婦警として働く藤枝淑乃^{ふじえだ よしの}から見みると、事件という単語はいつも隣り合わせに存在する危険な存在だった。

特に、彼女自身の幼い頃からの生い立ちを鑑^{かん}みるに、あまり良い事ではないが『素質』があつたのかも知れない。

全ての始まりは十五年ほど前。あのピアノ教室での発表会から始まり、動き出していた。彼女の中では解決していて、それでも未練すら残るあの事件の数々。

中々スリルのある人生だった——若干二十三歳にして彼女は生涯の締めのような言葉を思い浮かべ、気がついたように仕事へ意識を切り替える事にした。

そうだ、今回の事件は自分の短い警官人生の中でも緊迫した物である。

「——以上だ。くれぐれも慎重に頼む」

上司である薩摩廉太郎さつまれんたろうの長々とした説明が終わると、淑乃は窓の外を見つめた。

正しく言えば、窓の向こうに広がる壮絶な事件現場へと視線を移したと言った方がいいだろうか。この街の目と鼻の先でおきた巨大な火災。空へと伸びる黒煙が事件の不純さを物語っている。

ただの火災ではない、意図的な物。何度も響き渡る爆発音がそう伝えている。

こういう行いおこなをする犯罪者は決まって何かに恨みを持っている。根底からすれば人というのは何かしら恨みを持っているのである。けれど、本当に火災で恨みが晴れるのだろうか。

自らの犯した過ちあやまちを、理由を持って正統化しようとしてるだけではないのか。

事件というのは、常に犯人以外には疑問点だらけだ。犯行をした者にだけしかその合理性は理解できない。

「では、行ってきます」

淑乃は、同僚の黒崎美樹くろさき みき、白川恵と共に署を出た。

「なんだ、あれ……」

市民の大多数が見たのと同様に、高校からの帰宅途中だった戸長ひかる谷洗もその炎の目撃者となった。

街のだ真ん中にある巨大な高層ビルの上階から噴き出した煙は黒く淀んだ物であり、鼻につくほどの異臭をまき散らしている。

火事であるのは言うまでもない。が、恐ろしいほどの爆発音が中から響いているのも気にかかる。

何かしらの事件性を感じながら、洗はビルを見上げていた。

そこへ、けたたましいサイレンと共に駆け付けた消防車や救急車の群れが現れた。最後尾につけているパトカーから見ても、これは事件のようである。

「一般市民の方は立ち退いてください！ 大きな火災です、海辺の方まで避難をお願いします！」

パトカーから降りると同時に、三人の婦警はそう言って誘導する。その声に煽られるようにして、人々は押し合いへし合い走り出した。我が身可愛さか、生きるという動物的本能がそうさせるのか。緊迫感を感じるこの情景を見つめながら、洗はゆっくりと避難の列から抜け出す。この事件を自分の目で見ていたい、というのもあった。

がら空きになっているカフェのテーブル下に体を隠し、様子を見つめる。

避難者が一通り姿を消したところで、婦警達は大きなスピーカーで上空へと言葉を投げかけ始めた。

「無意味な火災はやめてください、我々は警察です！ 要求があるのなら――」

言葉を聞かないと返事するかのように内部で巨大な爆発音が響いた。

小さな瓦礫が辺りに散り、小さな戦場のような有様だ。婦警だけでは足りず、警察が増援して次々に人数が増えていく。洸は見つからないうちにカウンター側から厨房を周り、裏口に脱出する。

事件を一目見たいという好奇心と同時に、この状況にどうしても引っこかりを覚える。

「まさか、十五年前と……」

しかし、言葉を最後まで言う事はない。誰に問いかけるでもない声を上げれば見つかる確率も高くなる。

洸はビルに向かって移動する。警察が固めた正面は無理だが、反対側は見事にガラ空きだった。

遙か遠くにまで黄色いテープが張り巡らされている事から見ても、此処で誰かに見つかる事はないだろう。

裏面の窓を一か所たたき割り、そこから内部に突入する。もしもあの事件と同じ犯人なら。

「この手で仇を討ってやる……！」

どういつ手段でどうするかなど、考える余裕もなく。

洸は立ち込める煙の中、階段を昇り始めた。

既に事件状況はニュースが報じていた。ビルの上空を飛ぶヘリから撮影された最新の映像。

そこに映し出されたものを、野口郁人^{のぐちいくと}は友人である大門知香^{だいもん ちか}の家で見っていた。

「このビルって、すぐ近くのじゃない……？」

知香の不安そうな声とは裏腹に、イクトの顔は怯えとは別の表情を写している。

それは驚愕とも言えるものだった。幼い頃から、この世界と別の摂理で生きてきた彼にだからこそ分かる直感のようなもの。

「イクト君、大丈夫？」

「えっ」

名前を呼ばれて、初めて自分が震えているのが分かった。

使命感だけで動き出そうかと考えていた自らを恥じるように、深呼吸する。

そう、あの時とは違うのだ。あの頃の相棒は既にこの世界にはいない。自分一人で出来る事などたかが知れているのだ。

無言でテレビ画面へ視線を戻した郁人を見て、知香は何かを感じ取る。

長年付き合ってきた少年の行動など、分かり切った事だった。

「あれ、デジモンのせいなの？」

こちらにも驚愕して、イクトは彼女の目をマジマジと見つめる。少女は微笑んでイクトと視線を合わせる。

「……言ってきたら？」

「でも、」

「此処で見てるだけなんて、出来ないんじゃないの？」

全て、お見通し。

彼女に隠し事なんて出来ないし、彼女が隠し事なんてしない。
信頼してるからこそ、彼女の言葉は嬉しかった。

「ありがとう、知香」

イクトは立ち上がり、部屋の扉を開く。未来を目指す光だけがそこにあった。

玄関まで進み、彼が靴を履いた所で。知香は最後に告げる。

「なるべく早く、帰ってきてね」

子を送り出す親のように。

聖母のような微笑みで彼女は手を振っていた。

「必ず」

何もできないかも知れない、そんなイクトの決心が固まった。

続く

ep.02:第一話(2/4)「黒煙と怪物」(前書き)

第一話

新たな幕開け！ サラマンダモンの炎

ep.02：第一話（2 / 4）「黒煙と怪物」

巨大な原因不明火災から既に一時間が経過しようとしている。何のリアクションも見せない犯人に対して、警察は動き出す事も出来ずに硬直状態だ。

火の手を抑えようと消防隊が放水しているのだが、それでも犯人は何も言わずに内部で暴れているようだった。

その、あまりに理不尽な爆発音に人々の不安は煽られている。…警察もそろそろ動けるはずなのに。

「誰かへの恨みかしら……」

淑乃は動くに動けない自分に歯がゆい思いでいっぱいだった。

守りたい物があつて、守りたい街があつて、守りたい世界があつて。

そのために入った警察だったはずなのに。そのためにDATS時代のツテから警察業へ移行したというのに。

こんな時に自分は一切動けない。何の役にも立てない。

……何のための職だ。

奥歯を噛みしめて、ただ上を見上げるだけ。

無意識のうちに指がズボンのポケットに触れる。あれから一度とて手放した事のない絆の証を握りしめていた。

デジヴァイス。

だいまんすぐる

開発者でもあり、総責任者である大門英は、全ての事件が終わった後にこれを「デジモンと人を繋ぐデヴァイス」だと教えてくれた。いつも肌身離さず持っていれば、絆は再び繋がれるのだと。

「でも……」

今の自分はあまりにも無力だ。

こんな時、彼女がいてくれればどれほど頼もしいか。
たった一体の、自分を支え続けてくれた相棒。自分に今の生き方の全てを教えてくれた相棒。

分かっている。もうあの頃とは違うのだと。

それでも求めずには居られなかった。

——ララモン。

SAVERS 第一話（2 / 4）

黒煙と怪物

イクトは警察の目を盗みながら懸命に目的地へ向かっていた。

デジタルワールドで育った頃の感はまだ衰えておらず、木を使い影を使い先へと進み続けている。

こうしていると自分はまだ現実世界に適応しきれていない気がする。『あちら』でいた頃の勘の方が圧倒的に冴えている。

やはり自分にはこの生き方しかないんだと、深く実感させられる。

「もう少しっ」

こう考えると、知香の存在は心強いものだった。

彼女が教えてくれた生活と、彼女が教えてくれた人生。

そのおかげで同じ中学を何の不満もなく生活する事が出来るのだから、素晴らしい事だと思う。

いつも輝いて見える。彼女という存在そのものが。

何よりも眩しい光で自分を包んでくれる。弱いところも曝け出して、懸命に生き方を教えてくれている。

感謝しかできない自分が恨めしいほど、彼女にはお礼が言いたかった。

だから。

戦いしか出来ない自分を肯定してくれた彼女に報いるためにも。手を振って送り出してくれた彼女に感謝するためにも。

自分には行かねばならない。目の前に広がる戦場へ。

正面は無理だろう、警察が張っている。足早に周りの視線を気にしながら、裏手へと回り込む。

「……窓が割られてる」

到着してすぐに発見した。自分もそのつもりだったのに、誰かに先を越されたらしい。

一般人か、上で暴れている奴のものか。

いや、考えるのは後でいい。今は先を急がねば。

飛び込み、会議室のような部屋を抜けて先を目指す。エントランスのエレベーターは駄目だ、階段で。

遙か上階を目指してイクトは駆け上がる。

○

「はあ……はあ……」

目的の階まで後どれくらいだろう。そもそも此処は何階なのか。

洸にただ分かるのは、目の前の煙が勢いを増しているという事実。と、そこでひと際巨大な爆音が耳へと響いてきた。煙が一気に体を押し出す。

急いで手すりに掴まり、しばらく辺りの音に聞き耳を立てる。すぐ上の階から何かの声が聞こえる。それは人というより、まるで唸り声をあげる獅子のような声。

下からはもの凄いスピードで迫ってくる足音。声は聞こえないが、警察が突入を図ったのだろうか。足音は単体に聞こえるが……。

とにかく、見つかるとピンチだ。犯人を一目見るためにも、上の階へと進まねば。

疲労しきった足で階段を上り、声がする方へとゆっくり顔を向ける。

熱を感じるのは火の手があがっているからか。以外にも、火災そのものは一点集中で辺りは煙ばかりだ。

ただ、その一点の炎は凄まじい。

今にも爆発せんと言わんばかりの炎が辺りを燃やしながら揺らめいている。いや、もはや周りを「溶かす」勢いだ。

しかし、此処で尻込みはしてられない。十五年前の『不可解で理不尽なあの事件』の真相が分かるかもしれないのだ。

洸は走りながら火の中へ飛び込み、叫ぶ。

「おいこら、てめえ！ 何のつもりでこんな事……して……」

言葉を失った。

目の前には残念ながら人は一人も居ない。この部屋に居たのかも知らない人は……もう助からないだろう。

それほど熱は激しく、洸も頬を叩かれてたじろいだのだが……。人の代わりに『それ』はいた。

「グルウウウッ」

表現しがたい唸り声をあげながらこちらを見る。それは火を纏う巨大なトカゲのような生物だった。

口から吐き出す炎で辺りを焼き尽くしながら、瞳だけははっきりと洗を見据えている。

恐怖。悪態だけは強気な洗が、怯えたまま声を荒げる。

「なっ何だよてめえ……こんなのが、」

「それはデジモンだ」

後ろから同年代の少年の声が聞こえて振り向くと、そこには小柄な中学生が立っていた。

中学生と分かるのは制服だったからであり、あいにくそれ以上の情報はつかめない。

少年自身は洗よりも目の前の燃えるトカゲに用があるらしい。

「サラマングモンか。どうして今になってこちらの世界に……」

少年は説明するような、自分に投げかけるような曖昧な言動をとると、相手を睨みつける。

その態度からして、この存在……サラマングモンに会うのは初めてではないのだろうか。

どちらにしても落ち着きが妙に板についていた。

そして、何処となく悲しそうな瞳でそれを見上げている。

「おっお前！ 何者なんだ！」

震える声で、洗は少年に問いかける。精一杯の強がりでもあった。

「俺は野口郁人。お前は？」

「年上にお前って言うな！……戸長谷洸だ」

「洸。戦えるか？」

「無理ムリっ！ どうしろって言うんだ！」

使えない。

声に出さずして、そう言われた気がした……次の瞬間。

「なっ！？」

先ほどまで目の前にいたイクトという少年は一瞬で跳躍し、その拳を相手に叩きつけていた。

あれほどの燃え盛る体に殴りかかるといふ彼の行動も常軌を逸しているものだが、その体使いが常人では考えられないほど素早い。身のこなしが一般人のそれとは明らかに違う。ただの拳法家……でもなさそうだ。

何しろ、体全体から溢れだすような紫の粒子も気になる。熱くはないらしい。

しかも——敵に効いている。

あれほどたやすく相手がひるむのか。

責め立てられたサラマンダモンも反撃を始める。

吹き荒れる炎、それをかわしながらイクトの拳がヒットしていく。邪魔者か、洸は物陰まで下がって様子を見守る。それしか出来ない事に若干の罪悪感も感じつつ。

イクトの拳が次々に相手を翻弄していく。素早く、確実に。

サラマンダモンの炎はもはや的を失って四方八方に飛びまわるだけだ。

闘いながら、イクトの口元が自然と緩む。

——そう、この感じ。

——自分が生きてきた闘争心そのもの。

「お前、弱い。俺に勝てない、絶対！」

いつの間にか昔の片言が戻って来ていた。

体中の血という血が唸り、叫び、轟く。野性味のあったあの頃の自分が舞い戻ってきた。

勝てる。

そう確信した、次の瞬間。

「グアアッ！！！」

暗転。

空間の大気が一点に収縮したようにも見えた。

サラマンダモンに全てが集まり、一気に爆発。拡散。

熱風と炎が膨れ上がり、燃え盛る部屋そのものを爆散させた。

バックドラフト。

それがその技の名前だった。

辺りの酸素を詰め込み、炎を一気に解放する。体内に生み出された炎の真空空間が蓄えた酸素と混ざりあい、一瞬にして高熱を吐き出す。

イクトは熱風に吹き飛ばされ、遙か彼方の壁に激突し沈黙。

洩は周りの荷物と共に街の上空へと投げ出された。

下方から、驚きの声があがる。

「死ぬのか、俺は」

何となく、そう思った。

どうして。

これじゃ、あの事件と同じじゃないか。

「短い、命だったな……」

わずか三歳の自分を守ろうとしてくれた母。
何も出来ない自分。

何処から火が出たのか分からないうちに、全ては闇に溶けた。
母の足が、腕が、焼き尽くされていく。

自分を救助隊の元へと投げるように手渡した母。

そのまま、吹き飛んでいく。

曖昧な記憶の奥底で、彼女は爆ぜた。

自分のせいで。

母さんを置いていった、最低な父親との間に出来た自分という子供
のせいで。

望んで生んだわけでもない自分のせいで。

今も、同じ。

結局、事件は解けなかった。

どこか陰謀の臭いのする事件は、俺には解決できなかった。

俺は、最後まで誰かの荷物で。

年下の少年にすら守られて。

この事件と、あの不可解な火災は似ている。

もしかすると、あの『デジモン』が犯人だったのかもしれない。
でも、もう全ては終わったのだ。

何も出来なかった。

母さん。

ゴメンナサイ。

続く

諦めるな。

ep.03:第一話(3/4)「相棒と進化」(前書き)

第一話

新たな幕開け！ サラマンダモンの炎

ep・03：第一話（3 / 4）「相棒と進化」

ただ無鉄砲に戦っただけの自分に満足したとは言えない。
けれど、一応自分の力は出し切ったつもりだった。

デジソウルがまだ発動してくれてよかった、拳で戦う事が出来たのはこの力と「あの人」の存在が記憶にあったおかげだから。
いつも突拍子もない事をして、けれど全てを自らの道理でこじ開けてしまう。無鉄砲でいながら、爽やかに戦うあの人姿に憧れた時期もある。

だから、自分の拳たった一つで相手に立ち向かった。
けれど。

まだ何も救えないのか。

俺はあの人にはなれないのか。
マサル……。

「嫌だ……！」

違っじゃないか。

俺はあの人になるために此処に来たんじゃない。
自分自身であるために。自分という戦いをするために、この場に
来たのだから。

頭はまだ回っているだろう。体はまだ動くだろう。

「俺は、戦うしかない。それが俺に認められた生き方なんだ！」

デジソウルは、まだ輝く。

俺は、戦う。

SAVERS 第一話（3 / 4）
相棒と進化

世界は真っ暗に染まっている。体の力が抜けきっている。

俺は死んだのか？

それにしてもリアルな風を感じる。リアルな光を感じる。リアルな「生きている」鼓動を感じる。

五感が意識を主張しているのが分かった。俺に目覚めると言っている気がして、妙に違和感だらけな気分である。さらに。

「大丈夫か」

誰かの声が耳を通してはつきりと響き渡った。それが最終通告となったかのように、洸の瞳は自然に開く。

空が突き抜けて青い。流れる雲の群れ一つ一つに出来上がった影がくつきりと映っている。

導き出された結論は一つ……上を向いて寝ているという事か。

そして——顔の横に白い影。

小動物染みた顔がこちらを覗きこんでいるのが見えた。声の主は誰だ？

「起きれるか？」

目の前の小動物が自ら口を開いた。つまり……これは動物のような顔をして日本語を喋っているのだ。

一体何なんだ。それは兎のような顔をしており、耳は垂れ下がっ

ている二つと立っている二つ。頭から生えた髪のような柔らかい角と、首から下げた月のメダルが確認できる。薄桃色の肌は柔らかく見え、三日月の模様が体中にペイントされたかのように刻まれている。

そして、そんな生物が若干上から目線でこちらへ発言しているのだ。

違和感だらけにもほどがある。

体を起き上がらせ、その生物に視線を向ける。自然とイクトの言葉が思い出された。

つまり。

「……お前、デジモンか？」

「私に向かつてお前と言うな。愚か者！ 私はルナモンだ！」

何で怒られてるんだ。

とにかく、癪に障る事を言ったらしい。訂正が必要だろう。

「すまん、えーと……ルナモン」

頬を膨らませてこちらに睨みつけるような顔をしているルナモンを見て、言葉に対して威厳がない可愛らしさを感じるのだが……そんな事を考えている余裕はまったくない。

ふと、爆音が聞こえて視線を巡らせると、隣のビルから煙が上がっている。さっきまで自分がいた場所だろう。あそこにイクトが残っているかもしれないのだ。危険すぎる。

と、言うより……このルナモンが屋上まで運んでくれたのか？
だとしたらこいつの力は……

「サラマンダモンとか言うのと……戦えるか？」

「それはお前の行動次第だな」

「? どういう、」

言葉を言い終わるよりも早く。

「今から言う作戦通りに行動して欲しい」

強制するように、威厳のある声が洸に浴びせられた。

。

気がついた時、淑乃は既に走りだしていた。

壁となっていた突入班を押しつけるようにして、先頭へ駆け込む。遠くで同僚達が自分を止めようとする声が聞こえたが、それすら彼女には関係のない事だと割り切れた。

今までにない巨大な爆発と共に一人の少年が投げ出され、それを救ったのは小さくても見間違うはずもない『デジモン』だった。

まだ、この世界にデジモンはいるのだ。これはもう自分が下方から指をくわえている状況ではない。

自分の役目は五年前で終わったのではないという事。

まだ当事者なのか。

ビルの正面入り口を越え、階段を一気に駆け上がる。体力の疲労は気にならない。そんな事は後で考える。

けれど、あの小さな生物の姿を見て確信した。

「この事件はデジモンの仕業……っ!」

ならばする事は一つしかないだろう。
全てをその目で見届ける。他に何も出来ないとしても。
それが使命だ。

。

意識を取り戻してすぐにイクトは上階に向けて階段を飛び越えていた。

サラマンダモンは再び部屋を焼き尽くす作業に戻っていたため、この隙に上に逃げて作戦を練り直すつもりだったのだ。

階段の遥か下方から足音が聞こえており、突入が始まった可能性がある事も彼が隠れる要因の一つでもある。

見つかると捕まるだろう。自分が悪い事など一つもしてないとはいえ、やはり面倒事にはなりたくない。

階段をある程度上り、ふと後ろを振り返る。サラマンダモンには気づかれていない。

が、代わりに。

「おりゃああああ！」

明らかに彼より身長小さいデジモンにお姫様抱っこされた戸長谷洗が壁があつたはずの穴から飛び込んできた。

放り出されたかと思っていたが、あの腕力のあるデジモンに抱えられて近くの建物にでも身を隠していたのだろう。

あれだけ叫んで入ってきたものだから、すぐにサラマンダモンに気づかれる。

が、彼らはお構いなしに突っ込んできた。洸がサラマンダモンに一気に向かっていく。

——進化のために必要なデジソウルと言う粒子は、間接的であれ直接的であれデジモンとの接触で発生するケースが最も多い。

——より質量の大きなデジモンと接触すればするほどデジソウルの発生率は上がる。ルナモンよりも巨大なサラマンダモンに触れた方が、デジソウルは発生しやすい。

——デジソウルさえあればルナモンはより強く強靱な存在へと「進化」出来る。

それが洸に与えられた情報のすべてだった。

「だから、俺はあいつを殴り飛ばす勢いで行かなければいけない！」

躊躇しては駄目だ。デジソウルさえ発生すれば熱くはないと説明していた。

実際、目の前でイクトが同じ事をしたのだ。自分にもきつと出来る、今はそれを信じるしかない。

……落ち着いていこう。敵は目の前だ。
拳を向けて。

心の中で深呼吸するように。

ゆっくりと。

そう、このまま。

「今っ！」

洸が全力で跳びあがり、サラマンダモンにぶつかった。殴ると言うよりも、体当たりする勢いで火の体へ攻撃する。

熱くはない。成功した……のか？

黄色い粒子が体全体を包み込んでいる。自然と力が増幅されている、そんな気がした。

発生したデジソウルをどうするのかも、ルナモンが説明していた。その通りにやるしかない。自分はもう逃げる事などやめたのだから。

「ルナモン、受けとれえええええ！」

デジソウルは本来、デジヴァイスを通じてパートナーに伝えるものである。

しかし、それはあくまでも一例でしかない。
伝える意志さえはつきりとしていれば、デジヴァイスなしでも想いは届く。

ただ、確実にパートナーに届けるのが難しいため、デジヴァイスにチャージしてデータとして届けるのが王道なだけだ。

洸は今、無我夢中で力をルナモンに向けている。

その思いは負けたくない一心であり、伝える心は全力だった。他の何も考えず、ルナモンを見る。

その力が、伝わる。

「よくやった、洸……！」

光は、満ち足りた。

デジソウルチャージ。

ルナモン、進化。

「レキスモン……！」

ルナモンの背丈が伸び、より細身に変化していた。

拳に巻かれたグローブと顔に付けられた仮面が威圧感を放っている。身軽な格闘家のフォルムを彷彿とさせるデジタルモンスターの一体。

――レクスモン。

――ルナモンが進化した獣人型デジモン。

――必殺技は、月の力を借りて俊足から打ち出される……

「ムーンナイトキック！」

地面に降りた洸が最初に見たのは、その後ろ姿だった。

すでにサラマンドモンへと飛び込んだレクスモンは高速の連続蹴りでサラマンドモンを圧倒。

サラマンドモンはそれを受けながらも火を吹いて応戦。レクスモンが避ける度に火が辺りを舞う。

階段で様子を見守っていたイクトが息を呑む。

その戦い方はあまりにも優雅で神秘的だった、誰もが見惚れてしまつような美しい動き。

洸もゆっくりと後退して階段へ。イクトと再会する。

「お前、よく生きてたな」

「……イクト少年よ。年上に話す時の口の利きかたを教えてやろうか」

サラマンドモンとレクスモンは一步も譲らず、その拳と火を互いに打ち込んでいた。

下から響く足音は単体のようだったが、もうかなり近いらしい。

軽快に靴音が響いていた。

ならば、こちらの決着も早くつけなくてはならない。

レクスモンは一度距離を取って、洸へと視線を向ける。

アイコンタクト。直感的に言いたい事を理解した気がした洸は、先ほどこら輝きの収まりきらない拳のデジソウルをゆっくりと握り締める。

残りの輝きを、レクスモンへ届ける。

「頼んだぞ、レキシモン」

「……当然！」

洸が願いを込めながらゆっくりと拳を前へと突き出す。

すると、デジソウルは矢のようにレキシモンへと放たれ、それを受けて黄色く輝き始めるレキシモンの体。

背中からゆっくりと触手のようなものが伸びた。

よく見るとそれは重力に逆らって一本一本分かれた水の鞭であり、合計六本伸びたそれはゆっくりと一つに収縮していく。

それが、デジソウルから生まれた秘密兵器だった。

「グルウウツ！」

サラマンダモンが火の粉を飛ばすが、水の力が消火してレキシモンに届かない。

そして、水は姿を変えた。弓と矢に。

「蒼き万象よ。我の元で矢となり、かの者を滅せよ……ティアーアロー！」

水が黄金の輝きを放ち、レキシモンの唱えた言葉に従って放たれた。

サラマンダモンへと一直線に突き刺さり、内部から水が吹きあがる。相手の体を内部から押し上げるように爆発、拡散。

さらに、散り散りとなった水が次々に燃え盛る炎を消火。一つの技により、事件が瞬く間に修復していく。

「凄い……！」

「やったな、レキシモン！」

イクトと洸がその光景を見て素直に感想を口にする。
これで、一件落着。

……と、言うほど話は単純ではない。

「こちら淑乃、事件現場にて民間人を二名確認。どちらも軽傷。…
…はい、その件は申し訳ありません。ですが……いえ、了解です」

淑乃は見覚えのある顔を見て逃がしてあげたくもなかったが我慢した。これは仕事である。この場にいた以上事情聴取ぐらいは取らなければならぬ。

さらに、見知らぬ少年とデジモン。目の前で進化が解かれて成長期に戻ったそのデジモン……つまり彼が進化させたと云う事だ。
新たな事件の中心に彼が関わるのではないだろうか。

「淑乃！」

「イクト……悪いけど捕まってもらうわよ。その少年も」

こちらに好意的な声を上げたのに、冷徹にそう告げなければならぬのが痛かった。

そのせいで、五年前から言わなくなっていた口癖が自然にこぼれ出る。

「最悪なんですけど」

続
く

ep.04:第一話(4/4)「問題と実情」(前書き)

第一話

新たな幕開け！ サラマンダモンの炎

ep.04：第一話（4 / 4）「問題と実情」

今日の勤務の終了予定時刻は三時間前のはずだったのだが、未だに帰宅できる様子はない。

患者の傷や症状から事故が起きているらしい事は想像できたものの、それ以上踏みこむ手段は医者である少年にはない。

わずか十九歳という若さで手にいれたノーベル医学賞と新鋭の医療チームは光栄な事ではあったものの、あいにく肌にあった職業ではないらしい。

元々「妹であるリリーナの病気を治す」事が目的であり、医者になるのはそのために必要な段階の一つでしかなかった。

もちろん、同じ病気で苦しむ人を助けたい思いはある。それをするに相応しい能力もあるのだろう。

だが。

デジタルワールドと、ガオモンの存在を忘れた事など一度としてなかった。

常にあの世界に焦がれ、機会があるのならいつでも会いに行きたい。

「トーマ医長、妹さんからお電話です。至急取り次ぐようにとの事ですが……」

「……？ 分かった、次の検査は残りのメンバーに回しておいてくれ。戻ってきたら参加する」

「了解しました」

仕事中に電話を掛けてくる事などはない妹の緊急。何となく不吉な予感がする。

トーマは事務室の受話器をとって回線を開く。テレビ電話の向こうで神妙な面持ちのリリーナ・H・ノルシュタインの姿があった。

「どうしたんだリリーナ。仕事だからあまり長くは……」
『お兄様』

不安そうな顔に対して声は落ち着いていた。
逆に違和感。何がリリーナをこうも不安にさせるのか、今までの
どんな時とも様子が違う。

トーマはただならぬ事柄を感じ、声を低くして話を続けた。

「……何があつた？」

『つい先ほど電話がありました。淑乃さんからです』

かつての特務機関DATS時代の同僚達とは今でも時々連絡はと
っていたが、此処最近は忙しかったせいでメールもろくに返せてい
ない。

にも関わらず今回は電話で連絡を？ しかも緊急？

……間違いない、これはデジモンに関する事件だ。

自分に伝えなければならぬ緊急の要件など、デジモン以外考え
られない。会いたいからという高望みではないだろう。

『日本時間で十七時頃。二体のデジモンの存在を確認したそうです。
二体は死闘を繰り広げ、生き残った方にはパートナーの人間も確認
されたと……』

やはり。

デジモンはまだこの世界にいる。

たった五年しかブランクがないのは幸か不幸か。あの頃の記憶す
ら薄れぬままに再会が待っているのか。

いや、まだ会えると決まったわけでもない。自分自身はお役御免
の身かもしれないのだ。

「そうか……。で、僕はどうしたらいい？」

『淑乃さんとも話しました。お医者様として忙しいのでしたら仕方ないのですが……』

リリーナが言葉を止める。言うべきか悩むように視線が宙を彷徨う。

——行つてほしくない。そんな言葉を感じたが、彼女は無理のある笑顔で映像越しに微笑むと

『戦ってください』

トーマは既に白衣を脱ぎ、軽く深呼吸すると

「分かった。父上にへりを出すように伝えておいてほしい」

病院に別れの挨拶を言いに向かった。

SAVERS 第一話（4 / 4）
問題と実情

取り調べ室と呼ぶのはいささか問題があるだろう。これではただの客間だ。

そんな事を考えながら、洸は心地の良い柔らかいソファに腰を下ろした。

此処まで自分を連れてきた婦警も、一緒に捕まったイクトもこの

場にはおらず、かといって逃げ出す気にもなれない。

目の前に取り付けられている電子テレビが薄い半透明の画面に二ユースを映し出している。旧型なのか画面に時々ノイズが入るが、暇つぶしには十分だった。

ニユースそのものも、自分には大いに関係のある事柄を放送している。つまりは、ビル火災の事だ。

あれだけの長時間放火を続けたにも関わらず犯人は捕まっていない。誰が何故こんな事件を起こしたのか、それとも事故なのか、警察は何の情報も手に入れていないらしい。

「俺達の事を、隠してるのか……？」

実に違和感のある情報だった。しかし、今見てる自分と此処の一部の警官以外は疑問にも思わない「事実」なのだろう。

そもそも、目撃者として堂々と連れて行かれるわけでもなく、人目を気にするように裏からこっそりと抜け出して此処にやってきた。何もかもが違和感だらけだ。

「何よりも、お前が違和感なんだが」

「お前と呼ぶなど言っただろう、無礼な。私から見ればお前の方がよっぽど違和感だらけだ」

相変わらず、小さな体に似合わない物言いだった。

ルナモン。この世界に住む生き物ではない事は簡単に察しがついた。

五年前に「巨大怪物事件」として大きく報道された体のでかい黒い獣の事件同様の存在なのだろうか。

デジモン、それが姿形すらバラバラな彼らの名称。

おそらくそれはこの世界での「生き物」ぐらいのくくりでしかないのだろう。

「そもそも、デジモンって何なんだ？ どうしてこの世界にいる？」
「それは愚問だ。人間の世界には『国』という領土分けがあるんだろっ？ お前が旅行に出かけて同じ質問をされたら、答えられるのか」

それはかなり別の問題だと思う。国という分け方の「世界」と本来の意味の「世界」では規模が離れすぎだろう。

だが、確かに的を得てはいた。旅行に行くのは人間の感性の問題であり、旅行に来たからという以上の返答は出せない。
しかしだ。

「じゃあ、おま……ルナモンは自分でこっちの世界に来たのか？」

まさか旅行に来たのではないだろうな、等と思いつつ口には出さない。

ルナモンはムツとした顔で洸を睨んだ。

「サラマンダモンをデジタルワールドに返すために、派遣された」

デジタルワールド。この世界とは違う世界。

そこにサラマンダモンを返す。家出した馬鹿息子を家に帰るよう力づくで説得しに来たのか。

どちらにしても、彼女（だ）と思うのだが、そもそも彼らに性別はあるのだろうか）にとっては不本意だったのだろうか。

派遣されたというより、送りつけられでもしたのだろうか。

「まっ、話したくない事は誰にもあるさ。無理に言う事もない」

洸は軽めにルナモンへ慰めの言葉をかける。さりげないフォロー

のつもりで。

その言葉に若干驚いた様子のルナモン。

「なんだ、思ったよりもいい奴なんじゃないか」

「ひでえ。今まで悪い奴だと思ってたのか」

洸はルナモンに向かって笑いかけてから、天井へと視線を向ける。すぐに笑顔は消えて、まるでもつと遠くを見るようにしながら一言呟いた。

「そう。言いたくない事は、な……」

。

淑乃の上司であり、元DATS作戦司令官であつた薩摩廉太郎の説教は長い。

特に今回は、淑乃とイクトの用件がいくつか重なつた事もあつて話は繋ぐ繋ぐ。

命令違反で勝手にビル内部に飛び出した事、イクトが勝手に現場に入っていた事、デジモンの事。中には説教と言うより自伝のような話を始める場面もあつて、軌道修正には時間がかかった。

「とにかくだ、今後こういう事のないようにな」

やっと締めくくりの言葉が出てホッと一息ついた二人に向かって、今度は説教以外の言葉が向けられる。

「あの少年とデジモンの報告がまだだったな」

こういう切り替えが早い事だけは助かると淑乃は思う。

調べた情報はまだ少ない。洸に関してはまだ情報が皆無に近い状況ではあった。

ルナモンと進化したレクスモンの事、デジソウルの発生、サラマンドモンとその被害状況。

その辺の当たり障りのない情報だけが薩摩に伝わる。

薩摩も、身内調査がまだだという事は理解していたので、自ら歩き出すと

「仕方ない、事情聴取を始めるか」

どこかやる気満々と言った感じで応接間へと向かった。

扉を開くと、見張り一つつけていないのに律儀にソファに座っている洸とルナモンの姿。

もっとも、座っているというよりはダレて寝ころんでいる状況ではあったが。

「これより事情聴取を行う。君には黙秘権があるから、言いたくない事は言わなくてもいい。まあ、嘘は駄目だな」

お決まりの言葉も何処か崩して言いながら、薩摩は一人と一匹のテーブルを挟んだ対抗席に座る。

メモを開き、ペンを取り出す。と言っても自ら書くわけではなく、ついてきた淑乃に手渡すだけだ。

イクトも洸の隣に座ると、真面目な態度でピシッと背筋を伸ばした。

「まず一つ目の質問だ。戸長谷君は何故あの場所にいたのか」
「……」

黙秘するわけでもなく、無言になる洸。

薩摩は無言でうなずき、質問の順番を変更する。

「簡単な事から行こう。君は今までにデジモンを見た事はあるかね」
「……五年前に、一度」
「それ以外では？」

言つのを躊躇った洸も、仕方なく答える。

「十五年前、原因不明の飛行機事故に巻き込まれた事があります。
火の出火原因も謎で、突発的な事故でした」

「今回の状況と似ているな……それで、今回のが同じ犯人だと思っ
たか？」

「……そうです」

メモを取る淑乃。その姿を一瞥してから薩摩は続ける。

「飛行機事故で亡くした人はいるかね？」
「っ！」

拳を握りしめて、何かを堪えるように下を向く洸。
今度は質問を変えず、どう答えるのかじつと様子を見つめる。

「母親を失いました」

「……その当時と、現在の家族構成を」

「父親は家を出ていったので、母親だけが親でした。今は母の姉の
家で暮らしています」

「今の家で、苦勞する事はないかな」

質問の意図の不明確さに洸は眉をひそめた。

「何が言いたいんですか？」

怒気のこもった疑念で洸は薩摩の顔を睨む。もっとも、そんな事で臆する事がないのは承知の上だが。

それでも、あまりに不可解な質問に疑いを感じる。身元を調べるのに個人的な感情を質問するなんてナンセンスだ。

一体何を考えているのか、顔色を窺おうにも無表情の薩摩から感じ取れるものはない。

仕方ないので、洸は質問の答えを待った。何か考えがあるのだろう。

薩摩は相手の疑問が待つ体制に入った事をしっかりと確認して、十分間を持ってから本題に入った。

「君を、対デジモンの新戦部に招待したい」

無言で視線が対峙する。

何よりも、その言葉に一同全員が驚いた。誰にも伝えてなかったのだろう。

案の定、他から質問が飛び出して来る。

「薩摩隊長！　いくら何でも、彼はまだ民間人です！　戦う意志もない少年を――」

「ずいぶん丸くなったな、淑女。大門マサルの時はお前が自ら引張ってきたはずだが」

薩摩は咳払いすると、全員へ一度視線を配る。

三人が驚いているのとは裏腹に、ずいぶんと冷静にその様子を見守る一匹がいた。

他でもない、ルナモンである。

「薩摩と言ったか、随分思い切りが良いのだな。今の立場を捨てるのか？」

「捨てはしません。この立場は元々、『次にデジモンが現れる時まで』の仮の位置』という契約でしたので」

「最初からこうなる事を見越していた、と？ 中々深い素質だな」

「褒めるよりも自らの身を案じた方がよいと思います。これから戦うなら私の指揮下に入ってくださいますので」

「オリンポス十二神の末裔に契約を持ち掛けるとは、我々も落ちたモノだ。メルクリモンが聞いたら泣くかも知れないが」

「彼は人間との共存を望む仲間として、喜んでいただけると思いますがね」

「ふむ、そうだな」

薩摩と最も対等な態度で話したルナモンは、その小さな手を差し出す。

その顔は高ぶる獅子のような、猛々しい笑顔だった。

薩摩はその手を同じような笑顔で掴む。

「契約成立だ、このひ弱な相棒は私が責任を持って育成してやろう」「よろしくお願いします」

こうして。

洸に有無を言わせないうちに契約は成立したのである。

続く

ep・05：第二話（1／4）「恋愛と感性」（前書き）

第二話

信頼のデジソウル 閃光スナイモン

ep・05：第二話（1 / 4）「恋愛と感性」

作戦部特務訓練。

新作戦部隊の初任務と言ってもよい訓練。

備えるべき状況を想定し、隊員達が如何様に動く事が出来るかのテストを行う。

現在の陣営は三名。

藤枝淑乃。前作戦部時代からのベテラン隊員。基礎の完成した動きで訓練成績は優秀だが、思わぬアクシデントに対応しきれない事が多い。柔軟性が今後の課題か。

野口郁人。デジタルワールドで暮らしていた新隊員。体力と俊敏性に長けており、デジモンとのコミュニケーションもとれる。現在、体力では最も優れている。

戸長谷洸。一般候補からの新隊員。基礎的な体力はあるものの、それを進んで発揮しようとしないう。自らの意志で入隊していない事が大きな原因か。

「ふむ……」

どうにも戦力不足だ。薩摩は上層部への資料提出のために簡単な訓練データを作成して、溜息をついた。

淑乃とイクトの活躍に期待したい所ではあるものの、唯一パートナーデジモンを持つ洸には嫌が応でも戦って欲しい。

彼にはやる気を出してほしいが、では彼のやる気の活力とは何か。そう考えると、一番近いのは意外と大門マサルのような存在かもしれない。

きっかけ一つで志は大きく変わるタイプ。

アグモンを匿っていた当初の彼は、DATSに関する全ての事柄に反発していた。

アグモンを捕らえるやり方が気に入らなかったのだろう。

が、湯島所長による説得もあり意見を変えた。彼の戦えるホームグラウンドさえ用意してあげれば、彼は自ら好んで拒絶を撤回する。洸の場合はどうだろうか。

彼は元々巻き込まれた側の人間だ。戦う理由となったのも、失った母親への気持ちだけである。

彼の戦うための動機は、事件の真相に近づく事。デジモンとの因果関係がはっきりすれば、あっさりと新部隊に入ってくれるかもしれない。

しかし。

「その因果関係が簡単には掴めないわけだが……」

再度溜息。やはり疲労が溜まっているのだろう。

部隊設立、訓練、事件に関する情報の簡単な収集。睡眠時間を削って様々な事柄をこなしてきたが、三日目にして体が悲鳴をあげている。

昔はこれほど脆くなかったつもりだが、歳かもしれない。

先日まで空き部屋となっていた旧DATS作戦司令部を改装したこの新作戦部を静かな足取りで抜け出し、薩摩はコーヒーでも飲んで一息つく事にした。

……まだ内部の自動販売機は整っていない。コンビニまで行かなくては。

あの日からの生活は思ったよりも変化していない。

いつも通りに家に帰り、折り合いの悪い家族と食事をして、眠る。次の日学校へ行き、同じ事を繰り返す。

その学校の帰りに作戦部へ顔を見せる事を除けば、これと言った変化はない。

ルナモンは作戦部の元にいるらしく、普段の生活にも干渉してくる事はなかった。

「つたく、何で俺が……」

勝手に結ばれた契約。

自分が同意していないにも関わらず、洸はそれを断る事はしなかった。

自らすすんで戦っていく気持ちもなかったが、デジモンの存在が飛行機炎上事件に絡んでいるという予想が大きく真相に近づいている。近づける。

根拠のない感情だったが、何故か洸はそれを疑わなかった。

戦うのは怖い。ルナモンにデジソウルを伝えるための機械らしいデジヴァイスを貰っても、土壇場で逃げないと誓っても、自分は何処かで逃げ道を探している。

けれど、事件の真相に辿り着けるかもしれない可能性を断ちきる必要性もないのが現状なのだ。

ルナモンという存在から生まれた縁を利用してでも、自分の危機と母の死の答えに迫ってみせる。

……と、心でカツコよく決めてみせたのだが。

「何してるんだお前。そんなところで変なポーズとって」

自然公園を通り過ぎるところで、背中越しに失礼な言葉を飛ばし

てくる奴がいた。

洸が振り返ると、イクトが気味悪そうにこちらを見ている。気合いのガッツポーズ一つで変なポーズと言われるのは非常に惨めだ。とりあえず、このポーズを作った某格闘家に謝れ。

「お前って言うな、何度言ったら分かるんだ」

言いながらルナモンの顔が出てきたが洸は無視する。

同じ事を言っではいるが、ルナモンは自分の名誉のためだ。洸はイクトに社交性を教えてあげているつもりである。

もつとも、結果的に「年下にお前呼ばわりされるなんて自分の名誉に関わる」と言うのが結論なのだが。

しかしながら、イクトは気にする事もなく洸から視線を外す。

その視線が辺りを見回す。日曜日の公園、少しオシャレな雰囲気
の私服、誰かを探す様子。

これらの状況を総合すると。

「……ふーん、デートねえ」

洸はイクトから状況を聞く事もなく結論を出した。

その言葉に、イクトの顔が真っ赤になっていく様は中々に滑稽である。火災ビルでの凛々しい姿とは違う一面だった。

そして、彼女いない歴が年齢とイコールする残念な洸には心底腹立たしい事でもある。

と、真っ赤なイクトの元へ一人の少女が走ってきた。そうですか目の前に出てきますかしかも可愛いじゃないですかこんちクショウ。

「ごめんイクト君！ 待った？」

「いっついや、待ってない待ってない！ 今来たところっ！」

何故かドギマギと答えるイクト。まさか、今までこの状況をデトだと認識してなかったわけでは……あり得る。

まだ数回しか顔を合わせていない洸でも、イクトの性格は安易に想像できた。行動は戦闘馬鹿みたいだが、純情な少年であるのは言うまでもない。

洸の脳内で厭らしい笑みが浮かぶ。

RPG的に言えば「冷やかしますか?」「はい」だ。

「で、君がイクトの彼女ね」

一応探り程度に聞いてみれば、彼女の方も顔を真っ赤にした。驚嘆する顔はイクトと瓜二つで、馬鹿馬鹿しいほどにピュアな顔である。

……いいなあ、若いって。

高校三年、若干十八歳にして老人のような言葉を思い浮かべた洸はさらに問おうかと口を開く。

「いつからの知り合い? 仲良さそうだね」

「……小学生の時から、です」

「長い付き合いなんだ。イクトの事、好き?」

「……えっと、」

「いや、言わなくても分かってる。じゃあ、もうキスとかした?もしかして既に、つてぐはあ!?」

殴られた。二人同時に。

こんな時まで同時とは、本当に二人とも仲良いなあ等としみじみ思いながら、洸は地面に倒れた。

空は、今日も青い。

デートではなかったらしい。

いや、確かにデートらしい買い物をしているのだが……どうやら彼女の父親への誕生日プレゼントを買っらしい。

第一印象最悪なのに「ついてこい」とイクトが言いだしたおかげで、二人の楽しそうな姿をまざまざと見せつけられた。チクシヨウ。しかし洸の姿を気にしてるのか、はたまたデートだと意識してしまっているのか、何処となくぎこちない会話もあった。アクセサリーショップでの

「これなんて、どうかな？」

「それは女の子っぽいデザインだと思うなあ。イクト君のお母さんにプレゼントしたら喜ぶんじゃない？」

「そっか、女の子っぽいか……。知香もこっこの好きか？」

「えっ」

「いや、何でもない！ なんでもっ！」

なんて会話は楽しく聞かせてもらいました。

……チクシヨウ。

「まったく。何で俺が……」

さっき全く違う意味で使った気がする言葉が出てきた。

しかし、普通に自分は邪魔だと思う。洸自身として空気を読んでいなくなるかと思ったりもするのだが。

何故ついてこい等と言ったのか。理由が掴めない。

と、商店街の出口が見えてきた。良かった、解放される……。

「知香！ ちょっと待ってて、トイレ行ってくる！」

「あつ、うん」

イクトは何の脈絡もなく叫ぶようにして宣言すると、洸の襟首を掴んでトイレへ駆けだした。

まさか一人でトイレに行くのが怖いとか、そう言った事ではないだろうな。洸は引きずられるようにしながら考える。

すぐ横手にあるトイレ入口、洗面台の前で停止。イクトは先ほどまでの気の強い態度は何処へやら、洸に頭を下げて嘆願してきた。

「お願いだ洸！ その……ちっ知香へのプレゼントと一緒に選んでくれ！」

「……は？」

ついてこいと言った理由はそれか。

恋愛経験豊富で相談できる奴は他に居ないのか、あの淑乃とか言う婦警の方が知り合いだし頼りになるんじゃないのか。

よりにもよって俺に言うかこいつは。ラブラブなのは分かるが。チクショウ。

何度俺に悲しみを与えるつもりだ。ああ、素晴らしいかな恋愛。

「俺、生まれてすぐの時から十歳までデジタルワールドで過ごした。一応知香のおかげで今の生活もやっていけてるけど……」

「プレゼントを選ぶセンスは身に付けてないわけだな」

大きく首を振って頷くイクト。

何処までも純情な少年である。洸は頭を掻いた。

プレゼントを選ぶセンスなんて俺だって持ってねえわ、と愚痴を

零しそうになるのを必死に堪えて考えるポーズをとる。
さて、どうしたものか。

「そうだな、やっぱアレが大事だと思うぞ。ほら、心ってやつ？」

よし、何だか自分でも臭いと思うがそれらしい助言が出てきた。

「イクトは知香ちゃんが好きなんだろう？ 何をあげるかよりも、どんな心であげるかが大事だ」

凄いぞ俺、なんでこんなにスラスラとデタラメ喋ってるんだ。

自分自身もそんな経験などない癖に、よくもまあ言えたものだ。
若干自分が恥ずかしいのは気のせいか。

「でもまあ、何でもいいってわけでもないわな。知香ちゃんの好きな物とか分らないのか？」

「うーん……好物ぐらいしか」

「それでもいいじゃないか。御馳走してあげるとかさ」

「もんじゃ焼きでもいいのか？」

「あ、ああ。いいだろうよ」

もんじゃ焼きか、中学生二人で食べるには若干シニールだが。

しかしそれでいいだろう。物で残るものがないのなら髪止めみたいなのもつけてあげればより良いだろうし。

恐らくこの仲じゃあ何をあげても喜ばれそうだけだな。

「じゃあ、知香を誘ってみる！」

子供のようにはいしゃいでトイレを飛び出していったイクトを見守る。洗は後を追わなかった。

大事な場面を邪魔するつもりはないし、同時に入って同時に出てくれば不審にも思われる。イクト自身の提案にしてあげよう。そして、何よりも。

「もうこれ以上見せつけられてたまるか！」

。

淑乃が待ち合いロビーの椅子でゆっくりと待っていると、空港に個人用のヘリが堂々と降りてきた。

相変わらず財力だけでとんでもない行動を起こす人間だと思う。

玉の輿的には羨ましい限りではあるが。

とは言え彼を「男」として見た事はない。仲間ではあるが恋愛感情ではないフレンドリーな感じが旧DATSの魅力でもある。

個人用入口で係員から荷物チェックを受け、あまり大きくない荷物を抱えてトーマ・H・ノルシュタインは歩いてくる。

淑乃も立ち上がり軽く手を振りながら近づいていく。顔を合わせるのは二年ぶりくらいだろうか。

淑乃はテレビで定期的に顔を見ていたものの、実際に再会するまでには結構な時間が掛かったと思う。

「忙しいと思ってたから、こんなにすぐ来るとは思ってなかったわ」「僕もすぐに行くかは迷ったんですが、リリーナに背中を押されました」

苦笑しながらそう語るトーマはあの頃に比べて少し大人びたと思

う。

少年っぽい顔つきのままではあるのだが、漂う雰囲気は既に一般人とは違う。医者である事とも無関係ではなさそうだ。

何処から嗅ぎつけたのか空港には数名のパパランチもいた。あまり隣をピッタリと歩くのはよろしくないだろうか。

「凄い人気ね。天才イケメン Doktor ってところかしら？」

「ふふつ。光栄な称号ですね」

トーマの対応は全てにおいてあっさりしていた。一時期の彼とは思えない。

淑乃はそんな彼の態度に軽く微笑んだ。

その後、パパランチに関する苦い思い出を記憶から引き出してげんがりするのは仕方ないか。

今日の夕刊やニュース番組に、彼女として紹介されない事だけは願いたい。あんな思いは二度するほど楽しくもない。

既に外に用意していたリムジンに乗り込み、二人は新作戦部へと向かった。

続く

ep・06：第二話（2 / 4）「月の使者と一般人」（前書き）

第二話

信頼のデジソウル 閃光スナイモン

ep.06：第二話（2/4）「月の使者と一般人」

デジタルワールドの南東部には荒廃した大地の続くエリアが存在する。太陽の熱が常に循環しながら地面を侵食しているため、大抵のデジモン——特に植物型デジモン等は滅多に此処に近づく事はなかった。

そんなエリアに彼、ガオモンは立っている。

弱肉強食が掟であるデジモンは元々群れを成す習性が薄く、各個人で主張が大きく異なる獣型デジモンは特筆して他人と暮らす事がない。

五年前は人間達やそのパートナー達と暮らしていたガオモンも、野生に返ってしまえばその例に洩れない。

ただし、この住みにくいエリアに暮らしているわけではない。此処にやってきたのは、きちんとした理由がある。

デジタルワールドの統制を司り、絶対的な神である『イグドラシル』直々の。

「無差別なゲートの出現情報……もしもこれが本当だったら」

二つの世界の境界を今一度強固なものにしようと言う人間とデジモンの意思が崩される事になる。

人間がデジタルワールドに迷い込んで何者かに襲われる可能性や、デジモンが人間界に迷い込んで暴れる可能性もある。

非常に危険な事だ。事実ならば何らかの形で阻止しなければなら
ない。

だが、どうやって？

人間界で暮らしていたガオモンにとって、己の力だけで進化するというのは困難を極めるものだった。デジソウルによる疑似進化に慣れてしまっている。

自分一人で何ができるのか。

マサルやアグモン、ララモン、ファルコモンを探す事も考えたが……事態は一刻を争う。何しろ、イグドラシルが直接頼んできたのだ。

専属騎士であるロイヤルナイツではなく、一般デジモンであるガオモンに。

これは何かある。

長年頭の回る主人といたおかげか、自ずと思考が高まっているらしい。これは良い傾向か悪い傾向か。

どちらにしても、ゲートが開くという情報を確認しなくてはならない。それが今の最優先事項だ。

「ん……？」

そこまで考えたところで、ガオモンは彼方に何かを見た。

最初は縄張り荒らしのデジモンかと思った、最近はこの土地にやってくる荒くれ者も増えていると聞く。

だが、どうも様子が違う。

そう、あれは……人間だ。人型のデジモンではなく、真っ白なワンプースと麦わら帽子の少女。

歳は五年前の淑乃と同じぐらいか。発達した体はすでに女性のそれと変わらない。

少女が何かを手に持っていた。此処からでは確認できない、距離を詰めないで。

ガオモンはゆっくりと足を進め、少女へと近づいていく。はつきりとしてきた顔はまだ幼く、体に対して未成長な部分がかがえる。表情は暗い。……いや、無表情なのだ。何も考えていないような、まるで生きる屍のような表情。

少女は手に持っていた物を地面へとゆっくり置き、その場を立ち去っていく。

慌ててガオモンは飛び出した。

「まっ待て！ どうして人間が、」

しかし、その声に対して少女は振りかえって微笑んだだけだった。そう、本当にそれだけ。

それだけで目の前から姿を消したのだ。全ての理を無視したかのように、忽然と。

声をあげる事も出来ずにただ茫然とその光景を見ていたガオモンは、やがて小刻みに刻まれる音に気づく。

先ほど少女が置いた物だった。野球ボールぐらいの球体の真ん中で、赤くデジタル式の時刻表示が刻まれている。何かをカウントダウンしていた。

「これは……」

カウント画面に00:00:00の表示。その瞬間。

軽い衝撃がガオモンの小さな体を揺らした。その場に尻もちを付いて、その球体を見る。

真ん中のディスプレイごとパツクリと半分に割れた球体から一気にエネルギーが放出され、それを再び吸うかのように風が逆流を始めた。

知っている、この感覚。

まさか。

「時空振動爆弾っ!？」

月の使者と一般人

イクトと知香が帰ったのを陰から見送ってから、洸は一人家へと足を進めている。

家に戻るのは不本意であるものの、他に帰る場所もない。薩摩隊長の言葉が妙に的を得ていたのが今さらながら不満だ。

あの時の「今の家で、苦勞する事はないかな」「君を、対デジモンの新作戦部に招待したい」という言葉は、新作戦部に居場所があるような言い方だった。

今の家とは違う暮らしを用意してくれるというのか。

「……哀れみか？ 同情か？」

「情けない問いかけだな」

気がつく、ルナモンが何の気配もなく隣に立っていた。

体格差のせいか、膝あたりまでしかない小さなルナモンは立っていてもあまり目立たない。人の目を避けながらここまで来たのだろうか。

いや、それよりも。

「そんな事を言われる筋合いはないな」

「そうやって自らを絶対とするな。他から見ればお前は何処にでもいる普通の人間なのだから」

「……っ」

やはり、ルナモンの言動に時々苛立ちを感じる。分かっではいたが彼女の言葉の一つ一つに許しきれない棘がある。

何故上から言葉を投げかけてくる？ 何故俺を下に見る？ こい

つは、いや、俺を下に見る奴らは何かを勘違いしている。

俺は自分を高みに置いているんじゃない。全てと同じ位置に居るだけだ。

同列すら許さないのか、だから情けをかけるのか。

親を失う事しか出来なかった自分への、せめてもの慰めのつもりか。

「自分を高みに置いているのはお前だろう」

「ほう？」

「命令して、勝手に入隊させて、突然俺の意見に干渉してきて。ただの人間に対してやる事じゃない」

ルナモンはその言葉に意外そうな顔をした。何が言いたいのかは分からないが。

「何か勘違いしているな」

「はあ？」

洸はルナモンを疑問視する。勘違いも何もあつたものではないだろう。

事実、ルナモンは勝手に行動を起こして洸を入隊させたし『ただの人間』に対してたくさん事をしてきた。

迷惑しか掛けられてない気もするが……。

その行動は自らと関係のない人間に対して行う事としては、違和感の連続である。

この疑問に答えるかのように語るルナモン。

「確かにお前は大多数から見ればただの人間だ。だが、私は無能な奴を相棒には選ばない」

自慢げに語るその瞳は、まっすぐ洸の瞳を見据えていた。
その中に全て吸い込まれてしまいそうな、まるで月の煌めきのよ
うな美しい光。

洸は自分から視線を向けた事も忘れて、その姿に見惚れてしまう
ほどの何かを感じ取っている。

神々しいと表現するのすら陳腐すぎるほどの眩しさ。

「私は『可能性のある者』を選んだ。それだけだ」

「かのう、せい……？」

「愚か者は、手にした力を制御できない。自らという重要な存在の
ためだけに力を振るうからだ」

なりふり構わず、ルナモンは続ける。

「だが貴様の望む高みは他人との同列化。多くを望まない心が、力
を制御出来ると判断する材料だった」

視線は外れない。

友人のような、家族のような、先生のような。何よりも、恋人の
ような不思議な視線で。

「私は自分の意思でお前を……洸を選んだのだ」

彼女は悪戯っぽく微笑んで。

「それでは駄目か？」

可愛く小首をかしげて見せた。

洸は言い返す言葉もなく、その視線から目を離せない自分を嫌に
思いながら。

黙ってじつと見つめる事しかできなかった。

。

「トーマ・H・ノルシュタイン。本日付けで新作戦部に入隊致します」

きつちりとした敬礼で薩摩へと挨拶したトーマは、凜々しい顔で次の言葉を待つ。

薩摩が休んでくれと一言告げると、ゆっくりと体制を崩して柔和に微笑んだ。

「お久しぶりです、薩摩隊長」

「トーマも、よく来てくれたな」

新作戦部は旧DATSと同じ外装イメージを残したままだった。

古ぼけた感もあるテーブルや椅子などもその時から放置されていたものが大半である。もちろん、掃除はしているようだ。

懐かしい感覚でトーマは辺りを見回しながら、静かに聞く。

「例の少年は？」

「先にデジモンの出現反応の元に向かっている。さっそくだが君達も追ってほしい」

「分かりました」

淑乃とトーマはきつちりとした敬礼で薩摩に向かって決意を表し

た。

そのまま二人は自動扉を越え、廊下へと足早に進む。全てがどこか懐かしく感じられる。たった五年でありながら、随分と昔を思い出してしまふ。

しかしそんな笑顔ばかりの状況ではない。

——デジモンの出現反応。

まだ設備が整っていない作戦部でデジモンを感知する方法は一つしかない。

デジモン同士の共鳴反応だ。

自然界で生きてきたデジモンにとって、互いがある程度の距離感で近づけば自然と気配を察する事が出来る。

「新隊員のパートナーデジモンが反応を確認したんでしょうか」

「分からないけど、おそらくね」

二人でエレベーターに乗り込み、地下駐車場を目指す。先ほどのリムジンは到着と共に帰ってしまった。

通常任務用のパトカーしか道はない。毎度おなじみとなってしまう手段である。

おなじみと言っても、もうあれから5年経つのか。

「懐かしい出勤方法ね」

「こんな事もしてましたね……高飛車だった自分が目に見えるみたいです」

「そうね、確かにあの頃のトーマはマサルに並ぶ問題見だったわ」

軽く談笑すると

「行くわよっ！」

乗り込んだパトカーのサイレンとテンションをONにして、淑乃の運転するパトカーは一気に地上へと飛び出した。

。

少しの間、二人は視線を外せなかった。
が、何故か若干朱に染まった気がする頬と上ずった声でルナモンは口早に要件を告げる。

「こんな事をしている場合ではない！ デジモンが現れたのだ、今すぐ倒しに行くぞ」

「あっ……おう」

あまりにタイミングが突拍子もなかったので洸は疑問に思ったが、確かに何も無い時に洸の元にルナモンが来る理由はない。

つまり、最初からこちらが本題だったのだろう。

何となく残念な気持ちになったが、それが一体何に対して残念なのかは自分でもよく分からなかった。

「ほら、走れ！」

既にルナモンは駆け出していた。洸も急いで駆けだす。

足の長さや様々な理由を持ってあつという間に追いつくのは当然なのだが、ルナモンは地面を蹴りあげて一気に飛びあがる。

舞うように、滑るように空中で高さを固定した。手慣れた浮遊。

「飛べるのか」

「当たり前だ、私を誰だと思っている」

いや、ルナモンだろ……などとは言わない。

二人は目的地までひたすらに進む。インカム型無線から淑乃の連絡、出現位置ポイントB - 163。

すぐ近くだ、恐らく視認できる距離だろう。

洸は辺りを見回して、すぐに視線を固定した。

「見えた」

工場が立ち並ぶ海沿いの地帯。その煙突先にはつきりとした緑色の姿が見えた。

見た目から感じ取れる感想をそのまま口にする洸。

「巨大な昆虫だと……？ デジモンってのは本当に何でもありませんだ」

「あれは……スナイモンか」

ルナモンは苦笑いするような顔でスナイモンという名を持つデジモンを睨みつける。

スピード勝負。

分の悪い戦いになりそうだと、内心で溜息をついた。

続く

ep.07:第二話(3/4)「計算と信頼感」(前書き)

第二話

信頼のデジソウル 閃光スナイモン

ep・07：第二話（3 / 4）「計算と信頼感」

近場の海で釣りをしたところで大した物が釣れる訳でもないのだが、湯島浩はのんびりと魚を待っていた。

かつてのDATSの所長である湯島は、薩摩の連絡により新戦部の所長を務める事になっている。

が、彼にとってはそれは特別意味を持たない役職である。DATSの時は戦わなくてはならない状況であつたし、対抗するための仲間もいた。

……今はどうだ？

そう、今はパートナーはいない。自分には干渉する力などないのだ。

「薩摩は使命感でやつとるのかもしれないが……」

湯島所長は釣り針を見つめる。

ゆらゆらと左右に揺れる水の流れを、これと言った感情もなく見つめるだけ。

「ワシらはそろそろ後ろに立って、若いものに任せる頃合いじゃないかの」

呼ばれれば向きあおう。

必要ならば戦おう。

だが、それは最終手段にするべきだ。自分たち熟練者が目立つだけでは上手くいかない。

それはDATSを作る時にも説明したし、今回もまったく同じではないのか。

「もう、ワシらが何もせんでも……」

釣り糸が引つ張られる。小さな手応えを感じながらリールを引く。力強い生命が、捕られまいと必死に暴れている。命の本質、己を守るための手段。

「そう、勝手に獲物は喰らいつくし、勝手に若い者が戦うんじやよ」

湯島は力を強めながら一気に引き上げる。

水飛沫を上げながら、釣り糸に引つ張られて空中をさまよう魚。それを丁寧な手つきで針から外してやる。

「時々、こうやって釣り糸を引くのを手伝ってやるだけで良いとは思わないのか？」

湯島は魚を海に手放す。暇つぶしのようなこの行為で、魚の命を無駄にする気はない。

水を得て魚は生き生きと去っていく。黙って見送るだけだ。

空中で巨大な影が動いた。気づいていたが、スナイモンと呼ばれる昆虫型のデジモンである。

だが、湯島は黙って立ち上がり、それとは全く逆の方向へと歩きだした。

「だからワシは、若い者に任せるようにしてるんじやよ」

それは逃げる行為ではない。ただその場から移動するだけの意味しかなかった。

スナイモンがこちらに気がついた事を、洸は察した。唾を飲み込んで、視線を逸らさないようにしっかりと睨みつける。相手がどう動くか、それを見定めてから動く事が戦いの基本である。それぐらいなら洸でも十分にできるつもりだったが。

「危ないっ！」

ルナモンに吹き飛ばされる形で地面に伏せる。

そう。気がついた時、既にスナイモンは行動を起こしていた。

馬鹿な。距離的にはまだ百メートル近くあったはずだ。視認できる距離ではあるが、この間を詰めるスピードが速すぎる。

勝てるのか。この素早さで。

今のように何かあるたびにルナモンに伏せさせてもらっては戦いにならない、それは目に見えている。

『普通の人間』であるこの俺は、どう行動すればいい？

急いで視線を動かし、スナイモンの行方を追う。わざとらしいゆっくりとした旋回でこちらに向き直るのが見えた。

挑発しているつもりか。

「洸、デジソウルは出せるか？」

「殴らずに試した事はない」

「一度デジソウルを出している以上、体が覚えていればできるはずだが！」

そうは言っても。

洸は先日受け取ったばかりのデジヴァイスを取り出す。その長方形の小さな機体のセンサー部に手の平をかざして。

気合いをゆつくりとそこに込めるイメージ。

あの時と同じ気持ちを思い出して……。

「駄目だ、避ける！」

ルナモンの叫び声、洸は急いで飛び出して攻撃を回避する。

人間側を先に狙うつもりか。確かに自分がいなくなれば進化が出来なくなるといふ考えは理に適ってる行為だ。

「このままでは消耗戦だぞ……っ」

ルナモンが吐き捨てるように言って、頭の触角を輝かせながら走りだした。

「デジソウルを出せるように精神を集中している！ その間、私が食い止める！」

触覚から水球が放たれる。ティアーシュートと呼ばれる技だ。

しかしスナイモンはそれを華麗に避け、洸に向かって突進してくる。

ルナモンは急いで方向転換、再びティアーシュートを打ち込む。

今度は向かっている方向が明確なため直撃。

スナイモンは水球の勢いに吞まれて洸の左を越えて滑っていく。そうしていつまで洸を防衛出来るといふのか、無理のある話なのは分かっていた。

洸の視線がルナモンを追いながら移動。と、そこにパトカーが到着。

白と青を基調とする、あまり見ない色のパトカー。

「君が戸長谷洸君か」

助手席から見慣れない金髪の青年が降りて来て、洸に声を掛けていた。運転席側から淑乃が出てきた事を見ると、味方なのだろうか。スナイモンが再び向かってくる。

ルナモンは飛びかかって闇色に輝く爪で引き裂いた。ルナクロー。逃げるように上空に向かい飛翔するスナイモン。それを追うようにルナモンも高く跳躍。

洸とルナモンの姿を見ながら、金髪の青年――トーマは判断する。デジモンと出会ってまだ日が浅い彼がデジソウルをいきなり引き出すにはかなりの集中力が必要なはずだ。

今その集中が必要なのだとしたら、あのスナイモンの攻撃に邪魔されては意味がない。

スナイモンの攻撃が彼に当たらないように、ルナモンを誘導させるしか方法はないか。

ならば。

「洸君。目を閉じるんだ」

「トーマ、どうするつもりなの？」

淑乃の言葉すら聞かず、トーマは一点に洸を睨む。

それは敵対する眼差しではなかったが、何を意味するものとも取れなかった。

「馬鹿な。こんな時に、」

「いいから閉じる！」

トーマの叫びに負けて、洸は黙って目を閉じる。

「いいか、君は今からデジソウルを解放する事だけを考えるんだ。それ以外の事は全て無視していい」

諭すように語りかけるトーマ。

その言葉を疑心暗鬼しながら聞く洸だが、その声の裏にある絶対的な自信は感じとれる。

何かアイデアがあるのか？

「そのまま、ゆっくりとデジソウルを解放して。それだけに集中して」

ならば、言われたとおりになろう。

その考えが正しいのならば、それでみんなを救えるのならば。今は信じるしかない。

「ルナモン。君は彼がデジソウルを解放するまでの間、僕の指示に従ってください」

「青年よ、策はあるのか？」

「無意味な行動はしません。許可を」

「……承諾しよう。このままでは防戦一方だからな」

トーマは頷いて小型パソコンを取り出す。デジウィンドウと呼ばれる、自ら開発した作戦用機体だ。

何かを素早く打ちこみ、スナイモンを見る。

小さな計算が生まれ、彼の脳内を埋め尽くしていく。方向計算、向かってくる際のスピード、次の行動までのタイムラグ。

あらゆる計算を行い、予測を立て、作戦を練る。ルートは十二通り。そこにスナイモンの性格的特性。

確率の低いものから排除しろ、いくつ残る？ 三通り。三つの可

能性。

いける。

「ルナモン、ティアーシユートを右方向に……今！」

ルナモンは言われた通りに攻撃。先ほどまでスナイモンがいた方向とは全く関係ない位置だったが、そこに吸い込まれるように現れたスナイモンに命中。

半ば驚きの顔をしているルナモンに、トーマは感情を排除しながら指示。

「三秒後にその方向から見て左四十五度方向に攻撃を」

スナイモンは動きの止まったルナモンを隙と考えたか、洸の方へと一気に飛び込んでくる。

三秒後、四十五度方向。今。

……命中！

カーブを掛けながら洸へ向かうスナイモンへ水球がぶつかり、地面へと叩き落す。

完璧な計算、あらゆるものを理論で倒す知性。

ルナモンはその力に感激していた。あの青年の能力は本物である。

「面白いではないか」

「右二十度方向で接近戦を仕掛けてください」

ルナモンがトーマの手を借りてスナイモンを翻弄している間。そのトーマの後ろで瞳を閉ざしたまま立ち尽くしている洸は、周りの声を全て無視して集中していた。

胸の奥に熱く燃える光。デジソウルの輝き。それを表へと引き出す、それだけの事。

先ほどまでトーマの計算が失敗するのではないかと少し疑っていたが、今はそんな心配もない。

信じろ、新たな仲間である彼を。信じろ、己自身を。そして何よりも、信じろ。

「ルナモンを……」

無感情な自分が瞳を開く。風を感じ、気配を感じ、全てを取り戻す。

その手に新たな輝きを手に入れて。

「来た」

デジヴァイスのセンサー部に向けて、輝く手をかざす。

眩しいほどの黄色の粒子が溶けるようにデジヴァイスに注がれ、光が満ちた。

瞬間的に理解する。

ルナモンに力を渡す……。そのために大事な事は、彼女を信じる事だけ。

「いけえええ！」

画面いっぱいに広がった光がルナモンに一直線の弧を描いてく。

ルナモン、進化。

レキスモン。

「よくやった、相棒！」

レキスモンは空中を疾走するように駆け抜けて蹴りを決めようとする。

スナイモンは得意のスピードでそれを避けるが、そこに生まれた隙について拳を叩き込んだ。

衝撃。地面に向けてスナイモンが急降下する。

それでも敵の動きは素早い。何者をも寄せ付けない動きでレキシモンに迫ると、その鎌で切り裂く。

「っ！」

レキシモンは水の鞭を収縮して盾にする。体に軽い衝撃。その反動を利用しながら水の盾を転位させて弓と矢を生み出す。

少し距離を開き、スナイモンに向けて構えた。

が、それよりも先にスナイモンが迫る。矢を打ち出す暇など与えてくれない。

鎌に怪しい輝きが灯り、振りおろすと同時に軌跡を描いた。

その技を、シャドウシクルという。スピードに長けたスナイモンが持つ、遠距離まで届く鎌の力。

「くっ！」

避けようと動いて見るも軌跡のスピードの方が圧倒的に上だった。レキシモンは左肩に軽いダメージを受けて空中でバランスを崩す。

どうにか地面に落ちる事なく立て直したが、状況は思った通り不利らしい。

進化したのに、必殺技の的を絞れない。

敵の動きを封じるための力が必要だ、それは知性だけでカバーするものとは違う確かな物量。

誰がその役目を担う？ この場にそんな事が出来る人間などいない。

弓を構える事を諦めて格闘戦に行動を移したが、スピードではスナイモンに勝てない。

タイムラグ計算でいくらか拳をぶつける事は出来るが……先ほどまでとはわけが違う。時間稼ぎに抑えるのではなく、今度は一撃を決めたいのだ。

格闘術では勝てない。そんな圧倒的な接近戦の能力をレキスモンは備えていない。

どうする？

……その時。

「ダブルバックハンド！」

空に一つの影が見えた。

それはスナイモンの真上で両腕の拳をぶつけると、重力のままに地面へ降りてきた。

青い体と、犬に近い顔のライン、そして両腕のボクシンググローブがやけに目立っている。

名をガオモンという。かつて人間界とデジタルワールドを救った英雄達の一体。

そして、トーマに仕える戦士である。

「マスター！」

この状況でも、どこか嬉しそうな声でトーマの元へやってくるガオモン。

トーマもあまりの事にしばらく思考が停止したようだが、やがて心の底からの笑みが零れる。

「ガオモン！」

二人が笑顔で再会を果たす。それは五年の空白に対して言えばかなりあっさりとしたものではあった。

いや、喜びを分かち合うのを後回しにただけである。

トーマは凜々しく、ガオモンは雄々しく上空を見上げると

「やるぞ、ガオモン」

「イエスマスター！」

一人と一体の視線は、戦うためのものへと変わっていた。

トーマはあの時から肌身離さず持っていたデジヴァイスバーストを取り出し、センサーに手をかざす。

五年のブランクからか、デジソウルの解放がかなり不安定になっている。

全身から溢れるほどのエネルギーはなく、かざした手にのみ青い光が生まれた。

トーマはその光に少しの焦りを感じたがすぐに思考を変更。今は己の無力さに嘆いている場合ではない。

やるべき事は一つだけ。

「力の完全解放は無理か……ガオモン、頼んだ」

力は違っても、意志は変わらない。

「デジソウル——チャージ！」

ガオモン、進化。

ガオガモン。

四対の脚でその場に威厳をもった姿で立つ獣。

背中から伸びた赤い綿状の触手は意思で動かす事が出来る。そう、これさえあれば力は必要ない。

トーマが叫ぶ。

「レキスモン、スナイモンを地面に叩き落とせ！」

その声にレキスモンがすぐさま反応。

スナイモンが再び振りおろす鎌を間一髪で避け、そのまま一気に拳を振りおろす。

落下地点までガオガモンが走り、叩きつけられたスナイモンの両腕を取り押さえた。

「今だ！」

レキスモンは再び水の弓と矢を形成する。そのまま照準を地面へ。狙うのはスナイモンの体ど真ん中。矢が光を帯び始め——発射。風を切り裂くように矢は一直線に飛ぶ。スナイモンを貫き、地面にまで押し込んだ。

ガオガモンはその場から退避、もう抑える理由はない。水激がスナイモンを砕き、辺りに拡散していく。

作戦終了。

すつきりとした顔で、一同はデジタマに還るスナイモンを見つめていた。

「一度作戦部へ帰還しましょう」

トーマの声に反論する者は一人もいなかった。

続く

e p・08：第二話（4 / 4）「歓迎会と会話」（前書き）

第二話

信頼のデジソウル 閃光スナイモン

ep・08：第二話（4 / 4）「歓迎会と会話」

「私だ。……今現在、標的^{ターゲット}A - 02は発見出来ていない。……ああ、了解した」

精神共鳴——テレパシーによって通信を行っていた彼女は、小さな肩を溜息と共に落とした。

通信内容は単純な事である。今現在の目的の達成率についてだ。そう、探し物がある。それを見つけない事にはこの世界に來た意味がない。

だが……あいにく標的は見つかる様子がない。そもそも、それが本当にいるのかすら分らないのだ。

作戦内容に従っているだけ。自分でもこの行動の無意味さに少しは気づいている。

「本当にいると言うのか……？」

現実的に考えれば、まずあり得ない事だ。己という一個体はそこにしか存在しないものである。

しかし、標的は自らを二つに切り離れた……。肉体と、精神に。しかもその二つの自分を『人間界』と『デジタルワールド』にそれぞれ配置するなど不可能極まりない。

全く持つて理解出来ない事だと、彼女は二度目の溜息で呟く。

「見つけれぬのか？ 私が」

自問自答。

そして、彼女のプライドから自然とその言葉は回答となった。

「いや、任務は完遂してみせよう。私を誰だと思っている」

自信たっぷりに微笑むと、外部と遮断していた意識と瞳を開く。そこは狭苦しい機械の中。人間とデジモンが共に暮らすには、未だに人目につかないように匿う必要があるのだという。

それが共存と呼べるのかどうかは、彼女には分からなかった。デジモンと人間。

まだまだ不完全な関係ではあるが、良くも悪くも「事は進んでいく」のだ。

最終段階まで、付き合わせてもらおう。

SAVERS 第二話（4 / 4） 歓迎会と会話

作戦本部に寄ったのはついでのような物で、回収したデジタマを保管する意味しかなかった。

その後は今回の事件に関する簡単な資料だけ作成してお開きになる。

トーマ・H・ノルシュタイン。テレビをあまり見ない洸でもその名前は知っている。一つしか歳が違わないのに、難しい治療を成功させて賞まで取った医師である。

そんな彼がデジモン事件に関わっていたとは初耳だったが。

本部に居ても仕事一つなくボーツと状況を見つめていた洸は、邪魔者にならないようにと腰を上げた。

彼は元々学生であり、書類整理だったり何だっただりの仕事は基本行っていない。居るだけ無駄な役どころである。

「あー、俺は帰っても……」

おずおずと声を出してみると、トーマが反応を示した。

「少し待ってくれ、話がある」

重みのある業務的な声で告げたトーマはキーボードを叩く速度を早めて仕事をテキパキとこなしていく。

淑乃も順調な段取りで資料をまとめあげ、まだ名前も聞いていない元婦警二人も仕事をこなしている。薩摩隊長も含めて全員が旧知の間柄なようだが、洸には何がかさっぱりだ。

そんなこんなでただただ無言で全員の行動を眺めていた洸が、ふとデジヴァイスに目をやる。

画面の中に瞳を閉じて固まっているルナモンの姿。寝ているのだろうか。

ボタンを押してみると、時計画面になった。時刻は6時40分。さらに変更、ルナモンの個人情報保存されている。理解できない物が大半ではあるが、この数値は今後役にでも立つのだろうか。三つ目のボタンで画面は戻ってきた。ルナモンが静かに瞳を開く。

「お目覚めか？」

「この状況で眠りこけていたと？ 洸の計り知れないレベルの高度な作業をこなしていただけだ」

なんだかよく分からないが、どうでも良い事である。

暇だ、何故自分が残らないといけない……先に話を済ませればいいのに。

と、脳内で不平を零しているとトーマが立ち上がった。

「さて……仕事の終わった人から、予定の場所へ向かいましょう」

それはつまり自分の仕事が終わったという宣言でもある。渡された量からしてもう少し掛かる気がしたが、早い業務だ。

そして、洸に向けて一度目配せしてから歩きだす。付いて来いと言う事か？

洸も黙って立ち上がる。予定の場所とは何処なのか、何も聞いてないのだが。

自動扉を抜け、廊下を無言で突っ切る。

エレベーターの降下ボタンを押し、すぐに到着したので乗り込んで一階へ。

……。

「えつと……話つて言うのは？」

「ん？ ああ、何か固い話でも想像したなら失礼。そういうつもりじゃない」

固い話ではないらしい。

じゃあ何なのか、と問う前に一階に到着。そのままそくさと進んでいくので付いて歩く。

目的を教えて欲しいのだが、全く余裕がない。

妙に早足で歩くため、ついていくのにも精いっぱいなのだ。

「あのー……」

「気にしないでいい、もう少しで着く」

何処に向かっているのか知らないが、そんな事気にしてない。

それよりも、話と言うのは……？

だんだんと混乱してきた、一体何をどうするつもりなんだろう。

「ほら、着いた」

「……へ？」

古びた店が目の前に立っていた。中から何やら良い匂いが漂ってくる。

何の店が見るよりも早くトーマは中へ。冴も急いで来店。

「……あ」

「あっ」

どうやら、もんじゃ焼きの店だったらしい。

いや、それよりも……。

目の前にイクトと彼女がいるわけで。

えーっと。昼に言った通りのデートだと言う事でいいのか？ 冴

自身が提案したもんじゃ焼きデート。

「イクトに知香ちゃん。偶然だね」

トーマが爽やかな笑顔で挨拶したが、二人の視線は冴に向いていた。無論、嫌な顔で。

イクトに至っては「どういっつもりだ」という睨みが冴を捕えて離さない。まずい、非常にまずい。

不思議そうな顔でトーマが冴を見る。青ざめた冴の顔はさぞ滑稽だろう。

しかし、本人としては何だかわからないがもの凄く悪い事をした気になってしまう。まるでデートを潰しに来たみたいじゃないか。昼の態度も相まって。

とりあえず何と声を出そうか。

「……あの、何と言うか……スマン」

洸は、イクトと知香に向けて静かに謝罪した。

イクトはその言葉にも何だか不満があるような顔だったが、やがて視線をトーマに向き直す。

表情も怒りから笑顔へと変化した。

「トーマ、歓迎会此处でやるのかっ？」

その言葉に頷いてトーマは微笑む。

「そのつもりだったけど……お邪魔だったかな？」

「そんな事ない！ トーマ君、久しぶりっ」

知香も嬉しそうに声をあげる。どうやら此处も旧知の間柄だったらしい。

つまり、知人ばかりの場所に洸だけ投げ込まれた状況だと言う事か。

なるほど、歓迎会。色々繋がってきた気がする。

トーマが作戦部に着任する事に対する歓迎会なのだろう。イクトはこの事を知っていたが、デートを優先したのか……。

で、此处に来たのは何の繋がりか。いや、正直どうでも良い事だが。

とにかく、何やら自分だけ状況を知らされてなかったらしい……何となく孤独を感じた。

「日本に戻ってきたらまた一度は此处に來たいと思ってたけど、知香ちゃんとイクトが居たのは予想外の収穫だね」

そこへさらに淑乃や作戦部の人達が順々に流れ込んでくる。

あとはもうお祭り騒ぎな感じだった。大人らしい落ち着いた騒ぎ

ではあつたが、それでも大いに羽目を外した。
場違いな気持ちを感じながら、洸は静かに様子を見守る。

『まるで友達のいない子供だな』

「……あんまり例えになつてないぞ、それ」

デジヴァイスからルナモンが語りかけて来ても、覇気のない返事を返すだけ。

仲間に入れなくて寂しがっているらしい事は誰から見ても明らかなのだが、あいにく誰も見向きすらしない。

そんな雰囲気潰すつもりもないから洸も特に文句を言わない。

マイナススパイラルだ。

ルナモンはその子供らしさが妙に可笑しくて、洸に気づかれない程度に笑う。

——まあ、そうやって子供でいた方がいい。

——いずれこの楽しい日々は、戻れなくなるかもしれないのだから。

「じゃあ、少し時間をもらいますね」

トーマは立ち上がり、洸について来いと言ってから店を出た。

忘れていたが、話があるんだったか。歓迎会が話の主目的でないとは思っていたが。

何だか、今日は指示されてばかりだな。いや、元からこんなものだったかもしれないが。

後を追うように店を出て、トーマと向き合う。

「君にはいくつか、話したい事があつたから」

前置きして、早速本題に入る。

「まず、君は十五年前の事故の数少ない生還者だ。だからこそ聞かなくてはいけない。……君はデジモンをどう思う？」

トーマの目が、キラリと鋭くなる。

それはつまり先ほどまでの和やかな雰囲気で聞いているのではないという事だ。

事故……いや、事件について何かを知っていると云うのか？

「俺は、まだデジモンについて知識もないですし……」

「十五年前は、人間にとってもデジモンにとっても重要な年だ」

こちらの返答を遮るようにしてトーマは続ける。

何が言いたいのか、彼の言動はよく分からない。

いや、あえて隠してこちらの様子を窺っているのか。いずれにしても、信用していない人間に対してやる事だ。

仲間だと見ていないと、間接的に言われている気がする。

「児童連続行方不明事件。生まれたばかりのイクトも似たような境遇でデジタルワールドに送られた、デジモンとの最初の事件だ」

十五年前の事件。

それがデジモンと関係あるのか、洩には分からないが。

「僕は、あの飛行機事故も行方不明事件と繋がっているんだと予想している」

「だから何なんだ……？俺に一体何の関係が、」

「君はルナモンに選ばれたぐらいだ、デジモンと関わる素質がある」

話の先が読めない。

過去の事件に突っ込んだと思ったら、事故の話や今の状況に話題が戻ってくる。

掴みどころのなさすぎる話。洸の思考では追い付けない。

だが、トーマは気にせずに結論を告げた。

「僕は……飛行機事故でデジモンに狙われたのは君じゃないかと疑っている」

「……何？」

「君はデジモンに関われる存在。行方不明事件の本来の被害者は君じゃないかと考えた。だから君は狙われ、結果として母親も犠牲になった」

「全てが、俺のせいだと？」

「そうは言ってない。ただ、君が戦いに身を投じる理由があるのではないかと考えているだけだ」

洸は、言葉を深く噛みしめる余裕すらなかった。

事件を引き起こし、デジモンに狙われていたのは俺自身だと？

何故狙われた？ デジモンと関わる素質？ そもそも、何故この戦いに参加する存在として選ばれた？

答えを知っている奴がいるのか？ 誰だ、誰が俺を――

『トーマ・H・ノルシュタインと言ったな。その考察には足りないものが多すぎる』

デジヴァイスから声が響いたかと思うと、ルナモンは自らの意思で現実世界の大地に足を下ろした。

勝手に出てきた事を責めるつもりは全くない。洸は動揺しているし、トーマは出てきてくれる事を期待していた。

「洸が選ばれた理由が不明確であるにも関わらず、選ばれるべき存

在だとするのは考察とは言えない」

「それはルナモン、君自身が知っているはずだ。君が彼を選んだのだから」

「確かにその通りだな……偶然だという線は？」

ルナモンの口調が挑発的になって来ている。表面上は普段と同じだが、明らかに相手を試す口調。

薩摩隊長と話している時と同じ言葉遣いだ。

「デジモンが偶然パートナーを選ぶはずがない。ガオモンが僕を選んだのも、他のみんなにもそれぞれの理由がある」

トーマが感情的になってきた。ルナモンはまだ落ち着いた調子で返答を続けている。

ルナモンは内心で、この口論の勝者がどちらか理解する。まず、自分が負けるはずはないだろうと。

結果、それは成功した。ルナモンの言論は理屈すら捻じ曲げてしまつほどの威圧感を持ってトーマに投げかけられる。

「私はトーマとガオモンの出会いなど興味がない。だから聞かない。代わりに、私も教えない」

「それではあの事故の手がかりが、」

「第三者が口を挟む事ではない、それは洸自身が己の身で知る事だ。あの事故がお前にとってどういうものかは問わないが、洸の問題に首を突っ込むのは関心しないな」

トーマは言葉も出なく、そのまま黙って俯いた。

まだまだ青臭い、大人の中で育ったから自分を大人だと思い込んでいる——ルナモンはそんな事を考えながら洸に向き直る。

洸も茫然としている。確定していない情報だけでこれだけシヨツ

クを受けるものか……。

「洩、大丈夫だ。あの事件で狙われていたのはお前じゃない。断言してやる」

「……そうか」

「それと……トーマよ。一つだけ教えておいてやろう」

店に戻ろうと歩きだしていたトーマが足を止める。

「デジモンと人間の事件は十五年前が最初ではない」

自傷めいた笑顔で、ルナモンがトーマを見ている。
その瞳の裏で複雑な感情を揺らしながら。

続く

ep・09：第三話（1／4）「力と可能性」（前書き）

第三話

それぞれの力で… 装甲獣アンキロモン！

ep・09：第三話（1 / 4）「力と可能性」

ジュレイモンという巨大樹デジモンが主として君臨している森を総称して、ザガンダ大森林と呼ぶ。

かつてからそこに住んでいたファルコモン、そして植物型デジモンに分類されるララモンはそれぞれ思い思いにこの場所で生活していた。

特別一緒に行動しているわけでもないが、同じエリアに住む者を家族と見るジュレイモンの恩恵もあり、不自由のない生活を続けている。

さらに言えば、ファルコモンにとって父のような存在であるメルクリモンが転生した事も理由に挙がる。森のテリトリーは基本的にメルクリモンを守護神として尊敬する傾向があるのだ。

デジモンが転生すれば全ての記憶は失われるのだが、それでもファルコモンは変わらない対応を続けていた。

そのおかげもあってか、かつてのメルクリモンの配下は自然と彼の住まう無限氷壁周辺に集まっている。

今日もメルクリモンの呼び出しがあつて、配下デジモン達が顔を合わせた。

「メルクリモン様ー！ 会いたかったですー！」

一度は命を落とし、記憶を失っているはずのゴツモンも気がつけば彼の配下に戻っている。惰性のようなものだろう。

「まだ一日しか経っておらんだろっ」

メルクリモンが苦笑いしながらそう言うと、ゴツモンは頭を下げてその場でお辞儀をした。

ファルコモンもその隣に立つ。しばらくすると、ピヨモンもファルコモンの隣に立ってお辞儀する。

その後ろに成熟期デジモンや巨大な完全体デジモン達が控え、狭い無限氷壁の洞窟は一気にデジモンで溢れかえった。

その姿を一通り見まわし、メルクリモンは言葉を紡ぎだす。

「……まず、一つ謝罪せねばならない」

重々しい態度に、一同の体が固まる。

巨大な重責がメルクリモンに押し掛かっている事を、長年仕えていたファルコモンは声のトーンで察した。

「デジタルワールド中探しても、人間界へのゲートが常時開く場所はどこだけとなっている。それは知っての通りだろう」

かつて、デジタルワールドに侵攻した人間達が残した産物。

まだ完全ではなかった時空振動爆弾。本来なら二つの世界を繋ぐゲートは一定時間後に遮断されるのだが、試作品はそうならなかった。

開き続けるゲート。それを他のデジモンが通らないように守護するのがメルクリモンの役目である。

「だが、突発的に各地にゲートが開く事件が起きている。そのゲートを越えて人間界に降りた者がいる、私の配下の者だ」

人間界に降りる。

それは今のデジモンにとって未知数な出来事である。ごく一部を除いては。

だから興味惹かれるものがあるのは理解できるし、行ってみたくなるのも分かる。

しかし。

「これはオリンポス十二神である私に、ひいてはデジタルワールドに対する反逆罪である！」

メルクリモンは天高く轟くほどの声で怒鳴った。

珍しく、メルクリモンが怒っている。ファルコモンはその姿を久々に見た気がして、懐かしさすら感じている。

だが、事態は深刻だろう。デジタルワールドから人間界へ向かう事、もしくはその逆に関しては互いに干渉しない事がルールなのだ。それを犯した罪は重い。

「此処で代表者を選び、その者に我が命じる！ 反逆者を滅し、デジタマに戻るのだ！」

メルクリモンの目は、代表者を選ぶと言いつつファルコモンにだけ注がれていた。

人間界へ行った事があるから……だろうか。

「あちらの世界へ向かって、戻ってこれる保証はない！ だが、私の配下が犯した罪は、我が軍で払わなければならない！」
「お任せください！」

ファルコモンは自然に立ち上がった。

隣でピヨモンが何か言いたそうにしているが、イクトと合流してしまえばファルコモンの方が圧倒的な戦力になる。

一度は記憶を失ったとしても、その後にファルコモンが話した思いが頭の中にあったメルクリモンは、そう考えていた。

「やってくれるか、ファルコモンよ」

「もちろん！」

「ならば任せよう、我が望みを託して……！」

デジタルゲートへと、ファルコモンが進む。

その姿を陰から見ていた少女が一人。羨ましそうな顔をしてから姿を消した。

SAVERS 第三話（1 / 4）

力と可能性

トーマ・H・ノルシュタイン着任後の洸の出番はほとんどなかった。

自らプランを立て、実行する。洸とルナモンに回ってくるのはおとりか誘導か警備か、そんなところである。

今日も今日とて、朝から呼び出されたにも関わらず出番はなかった。無意味すぎる存在。

そもそもイクトは中学生、洸は高校生である。大人のみで解決できるなら呼び出さないで欲しいのだが……。

と、言う事でデジモンを撃退した後は解散となった。ルナモンは便利性的ために洸のデジヴァイスの中で過ごしている。

『これから学校か？ ご苦勞な事だ』

「本当だよ。折り合いの悪い家族に話をつけて朝から出てくるだけでも大変だつていうのに」

『その愚痴はもう十回は聞いたぞ』

「まだルナモンには七回しか話してない」

『一々数えているのか、細かい男だな』

なんだかんだ言っても、こういう会話は出来るようになった。とはいえ、あの出会いからもう二週間弱経っているのだ。新戦部にも慣れてきたし、デジモンと言うのも何となく掴めてきた。あの時トーマに言われた言葉がどうしても引つかかるが、それを除けばそれなりに働いているつもりだ。

『しかし洸も、住んでいる家も難儀な物だな』

『何がだ？』

『薩摩の言っていた通り、作戦部の部屋を借りればいいだろう。一人の方が気が紛れるぞ？』

確かに、それは最初に言われたとおりだった。

まだ全員が自分の家から通っている作戦部だが、一応隊員用の部屋が用意されている。

一度見させてもらってはいるのだが、どうしても移ろうという気にはならない。

それに。

『よく言うな。お前がいたら一人とは言えないだろう』

『私ぐらい気にしなくても良いではないか。……それとも、やはり一人ではないと出来ない事があるのかな？』

『……黙ってる』

『恥ずかしがる事はないぞ、健康的な男なら盛りをついた犬のようなものだからな……くくっ』

『お前は、そういう下品な話を笑顔でするなっ』

こんな調子である。

つまるところ、ルナモンはよく話す。うるさい時すらあるのだが、

暇つぶしのような存在である。

彼女がいる限りは、あの家でも何とかなるかも知れないと感じているのが素直なところだ。

そんなわけで家に戻った洸は、特に家の誰とも話す事なく部屋で着替え、そのまま学校へと出かける。

居心地の悪い家で過ごすだけの時に比べれば、今はかなり充実していた。

こちらの方が性にあってるのだろうか……。いや、深く考えなくてもいいだろう。

○

学校では可もなく不可もない存在である。

少なくとも洸自身はそう考えて、そう感じているのだが。

「おはよう」

「おう」

今日もクラスメイトの少女に声をかけられて、それっばい返事をしてから自分の席に着く。

すると、教室でよくつるんでいる男子が鼻の下をのばして近づいてきた。

「おい洸」

「何だ、気持ち悪い声出して」

「お前は今、あの大人しいクラスの美少女、さえきのぞみ佐伯望未と挨拶を交わ

したわけだ」

何が言いたいんだこいつは。

そもそも、この男は女の話題しかない。やれ、クラスの誰が誰と付き合ってるだの、やれ、合コンに行った事があるだの。

それこそルナモンの話ではないが、盛りのついた犬みたいな存在だ。

「俺は佐伯さんと挨拶すらした事がない……この違いが分かるか？」

「さっぱり分かんらん」

「鈍い男だなあお前も！ 佐伯さんは洸が好きなんじゃないのかっ！？」

いや、そう言われても。

彼女は基本丁寧な性格で、こいつには挨拶しなかったが普段は色んな人にきちんと挨拶をしている。

こいつが嫌われてるだけではないのか。まあ、言ったら傷つくだろうから言わないが。

俺が返事をする前に、この男はベラベラと情報を喋っていた。

「佐伯さんが一日にお前を見る回数を数えた事もある。何十回と見られてるのに、お前ときたら……」

なるほど、それだけ一人の男子を何度も見れば……って、お前は授業を聞けよ。

彼女は確かに美少女だし、見られて悪い気はしない。それは誰だってそうだろう。清楚なイメージと長い黒髪は確かに一般高校生を軽く凌駕している。

メイクだってほとんどしてないみたいだし、今時の学生って感じはしない。

だが、高望みして失敗する事はあるし、正直俺は……彼女が苦手だ。

清楚なイメージと言えば聞こえはいいのかもしれないが、冷静な視線が何を考えているのか分からない。いつも貼り付けたような笑顔と無表情のどちらかだ。

まるで感情がないみたいだと、失礼ながら思った事もある。

「まっいいけどさ。自分で気づかないだけで結構モテてるんだぞ、お前」

最後にあの馬鹿は嘘くさい台詞を残して去っていった。

……彼女いない歴がイコールで年齢の俺に、そういう言葉は慰めにもならない事を知るべきだ。

すぐにチャイムが鳴り響き、俺は授業という名の昼寝に静かに堕ちていった。

。

新作戦部の専用パソコンで書類を整理していた淑乃は、呟くような小さな声ながらにトーマへ問いかけた。

「ちょっと厳しすぎるんじゃないの？」

トーマはその言葉を聞くと一度手を止める。何気ない動作でパソコンからディスクを抜き取ると、別のディスクに差し替えた。

その最中に、これまた呟くように返事を返す。二人とも仕事をし

ながらなので妙に上の空な会話だ。

「何がです？」

「洗の事。敵対する事でマサルみたいに決起させられるんじゃないかって思ってるのかもしれないけど……」

淑乃が視線を上げて、トーマを見る。

「彼はマサルとは違うタイプよ。このままだと、」

「いえ、彼はマサルととてもよく似ています。そう、とても」

トーマも視線を淑乃に向けた。二人の視線が交差する。

別段ドキッとする事もなかったが、トーマの視線は淑乃を透かして遙か遠くを見るような不思議な視線で違和感を感じた。

「感情で動いて、先の事は考えない。けれど、いざと言う時には必ず力になる。そういう存在です」

マサルに直接此处まで言う事はないだろう。

素直な態度に淑乃は自然と笑みをこぼした。やはり、彼らは最高の仲間だ。

「随分と早くから認めてるのね、洗の事。……だったら、戦わせてあげたら？」

「いざと言う時には」

トーマは先ほどと同じ言葉を繰り返した。

その言葉の中にある意味を、淑乃は頭の中で巡らせてみる。

いざと言う時には。……つまり。

「今がその時じゃないって事？」

その結論にトーマは首を縦に振った。

「まだ仮定の段階ですが……彼のデジソウル反応を見てください」

パソコンの画面を切り替える。先ほどのディスク内のデータだ。その中から「digi-soul」の項目を選び、画面を拡大。様々な図が書き込まれたデータの後半にある記述を指さす。

淑乃はその画面に顔を寄せた。それぞれのデジソウルの特色をまとめた欄である。

その項目の一番下、戸長谷洸のデジソウル。

「デジソウルパターンはこれまでの物とは違い……」

デジソウルパターンはこれまでの物とは違い、どの物とも合致しない波形を示している。

部分的にそれぞれの物とは繋がるが、完全に繋がる例が存在しない。

新種の波形の可能性があるが、それと同時に不可解な点がある。すべてのパターンと「部分合致」する点である。

トーマの「ケモノ」に対する波形が最初の二センチほど続いたかと思うと、まるで画像をつなぎ合わせたかのようにマサルの「リユウ」のデータに重なっている。さらに、そこから淑乃の「ムシ・クサキ」、イクトや知香の「トリ」等、それぞれのパターンが少しずつ繋がっている。

彼のデジソウルは状況に合わせて「変化」しているのではないか。つまり、彼のデジソウルは特殊なのかもしれない。

また、ルナモンに与える瞬間のデジソウルは必ず「アンコク」の波形に一致する。これはつまり、パートナーに合わせた変化が出来

るという事だろうか。

「つまり……」

「場合によっては僕達がいなくてもデジモンを進化させられるのかもしれない」

変化するデジソウル。

難しい話は除くとしても、それはあり得ないはずの事だった。

つまりは、特定のパートナーが必要ないかもしれない。どのデジモンにもその場でデジソウルを与える事が出来る。

十五年前の事故、現れたデジモンが狙っていたのは……。

続く

ep.10:第三話(2/4)「平和と崩壊」(前書き)

第三話

それぞれの力で… 装甲獣アンキロモン！

ep.10：第三話（2 / 4）「平和と崩壊」

ファルコモンが人間界へ向かったらしい。

同じザガンダ大森林で暮らすかつての仲間、ララモンがその話を聞いたのはつい先ほどだった。

この不安定な状態で人間界へ向かうのは危険な行為だ。それも、一人で。

メルクリモンが命じたのだろうと考えたララモンはすぐさま無限氷壁を目指した。

今、ようやく見えてきた氷壁内の洞窟入口へ向けて全速力で近づいていく。

「メルクリモン！」

入ってすぐに叫ぶと、奥の方で気配。中にいるらしいので、話はずぐにつくだろう。

氷柱の回廊を越えてメルクリモンの巨大椅子の区画に入る。予想通り、そこでメルクリモンは椅子に座り、黙ってララモンに視線を向けた。

「ファルコモンを人間界へ送ったって聞いて……っ！」

「その通りだ」

特に隠す事もなく、メルクリモンはあっさりと答えた。

ララモンもそれを予期していたのか、返事に驚く事もなく言葉を向ける。

そう、本題は――

「あたしも行かせて」

はつきりとした意志のある黒い瞳がメルクリモンを見つめる。

最も感情の薄そうに見える目に反して、ララモンは己の感性に素直な性格だった。

今も考えているのは一つだけ。

人間界へ、再び向かう事が出来るのなら。それだけを願って此処まで来た。

決断はもはやメルクリモンに与えられていない。彼が否定したところでララモンは意地で向かうのだろう。

「全くどうしてこうも私の周りには……」

強情な奴が多いのだ？

メルクリモンは自傷気味に溜息をついて、頭を掻いた。その顔には何処か諦めにも似た表情を読み取れる。

同じオリンポスの面々と言い、このララモンと言い、他にも……
妙に強引な奴がいた気がする。

私に世話ばかりかけさせよって……。

「分かった。許可を下ろそう」

「ありがとう、メルクリモン！」

「ただし、だ」

最後に、スツと今までの剣幕を消して。
メルクリモンは柔和に微笑んだ。

「必ず戻って来い。待っているからな」

授業が終わると早々に洗は支度をして帰る。

毎日作戦部に顔を見せに行くし、特に学校にいる理由もないのが主な理由だ。

だから今日もそうするつもりで鞆を持ち上げ、そのまま教室を出ていこうとしていた。

……だが。

「なっ」

それを見た瞬間に言葉を失う自分が嫌になる。

自分自身への問いかけ。無意味ながら口から吐き出された。

「嘘、だろ……？」

顔が妙に強張っているのが自分でわかる。

既に何度も見て、何度も戦い、何度も勝利を手に入れてきたはずなのに。

自分にとって平凡ながら平和の場所だと認識していたこの場所で。

……どうして。

「なんだあれ……？」

「どうしたんだ？」

「やばいぞ、逃げた方が——」

口々に感想を述べるクラスの声、学校中の方が耳を素通りしてい

く。

黄金に輝く巨大な体が、重たい動きで体を逸らし……刹那。

「うわああ！」

何処かで、いや、そこかしこで叫び声。爆音と共に隣の校舎が抉り取られる。

破壊したのはその巨大な存在の尻尾だった。巨大な鉄鎚が付いているその尻尾をひと振り。

今は放課後だからあの階で授業をしてる者はいなかっただろうが……問題はそこじゃない。

これは。

『何をぼさつとしている、戦うぞ！』

ポケットからルナモンの声。デジモンを察知する能力があると言っていた癖に、大事な時には伝えるのが遅すぎる。

とにかく急いで実体化^{リアライズ}。ルナモンはその場で空中に飛び上がり、黄金の装甲に向けて水球を放つ。

ティアーシュート。

が、その装甲は見た目通りの固さを持ち、ルナモンの攻撃ではびくともしない。

洸は深呼吸して集中。大丈夫、ルナモンはやられない。

だから今は手助けしてやるべきだ。戦うべきだ。己の感情は捨ててもいい、引き出せ、胸の奥に秘めた力を……。

いつもそうだ、何色もの光が胸の中を駆け巡る。自分が手を伸ばし、一色だけ掴みとる。黄色く輝く光だけを。

大丈夫、今度も出来る。そう……今！

「デジソウル、チャージ！」

洸は瞳を開くと同時にデジヴァイスへ光を注ぎこむ、此処数日は順調にデジソウルを開放出来るようになってきた。

ルナモンの体に確かな輝き。その場で姿を変える。

ルナモン進化、レクスモン。

その場で進化したレクスモンの足から力強い蹴りが放たれる。ムーンナイトキック。

だが、やはり黄金の獣の装甲には傷一つつける事ができない。

「アンキロモン……装甲の厚いデジモンは私が相手できる者ではないか」

レクスモンが宙に舞いながら悪態をつく。

今対峙しているアンキロモンというデジモンは、その装甲の固さと尻尾についた巨大な鉄球で安定した破壊力を持つ。

レクスモン自身はおるか、トーマとガオモンすらアテにはできないだろう。

熟練者の癖に成熟期以上に進化する事の出来ない彼らを最初から頼りにするつもりはなかったのだが、一人では分が悪い。

必死に考えながら、レクスモンは洸を見る。

窓から覗きこむような体制でこちらを見ている洸。彼の本当の力から言えば、今すぐ次の進化を覚醒させる事も……。

「グアアッ！」

アンキロモンがその体で公舎に突進して、なりふり構わず破壊していく。

洸も含めた学生達が次々に避難しているが、おそらく全員は助からない。

少しでも多く助けるには、もっと強い力を……。

「ティアーアロー！」

レキシモンは効かない事を承知で次々に水激の矢を放っていく。
装甲に小さな傷をつけることは出来るかもしれないが……。

アンキロモンが上を向く。視線が怒りの眼差しでレキシモンを射抜いている。

やられる……？ 否。

「来るなら来い、忌まわしいバグめ」

レキシモンが啖呵を切る。アンキロモンがジッとレキシモンをにらみ続けている。

そうだ、空にいる間は少なくとも攻撃されない。この場からどうするかはともかく、そこにいる以上は安全だ。

牽制しつつ場所を移動していくべきか、それとも此処に足止めしておくべきか。

が、考える余裕はなかった。

爆音。

校舎に巨大な踏みつけを加えたアンキロモンはその場で尻尾を振り鉄球をぶつけ、レキシモンの事など忘れたかのように破壊を再会した。

このままでは危険な事は分かっている。

面倒な、どうしてこんな人の多い場所に出てきた……！

いや、分かっている。現れるデジモン達が狙っているものは……。

「洸か」

無限へのデジソウル。可能性とその力の強大さ。
十五年前から、誰もが欲しているその力の意味を。

「ならばどうすればいい。洸を売って他の全ての学生を助けるか？」

そんな事は鼻から考えていない。口に出した一つの提案だ。

だがそれ以上の妙案がなければ、それを実行するしか手がない事もまた事実。

考える、他にどうすればいい？

やはり洸のデジソウルをもう一段階大きく引き出してもらうか？
完全体に進化出来れば……。

しかし、洸はまだ力の引き出し方を理解していない。無理やり覚醒させる事も可能かもしれないが、力が暴走すると恐ろしい事になるのは承知している。激怒から生まれた力や、絶望から生まれた力も同様だ。本人の適正から外れた力は人自身を飲み込んで肥大化する。

考える、何かあるはずだ。この場で奴を抑え、人をより多く助ける方法が。

「グアアッ！」

雄たけびと共にアンキロモンが暴れまわる。校舎は半壊と呼ぶには生易しいほどに崩れ去り、降り注ぐ瓦礫が子供達を襲う。

だから決断するのか？ 私が、洸を売るという最悪の決断を。しかし、やはりそれは……。

「おいアンキロモン！ 俺は此处だ！」

怒鳴り声。アンキロモンへと向けた洸の声だった。

自分が如何なる力を持っているかも知らないはずの彼自身が、囀となるような真似をしている。

あるいは、本人にとってはハッタリのつもりだったか。しかし、

狙いはまさしく洸だ。

「あれでは逆効果だ！」

レキシモンが急いで地上に降下していく。このまま洸を見捨てるわけにはいかない。

だが、間に合わない。アンキロモンは振り上げた尾をそのまま、重力に逆らう事なく撃ち込んだ。

衝撃。大地を揺らす爆音で逃げる生徒達が転ぶ姿が見えた。

「なっ……」

目を見開いて、声すら出せないレキシモン。その姿は今まで冷静だった彼女とはまったく別の姿だった。

救えなかった。こんな下衆野郎相手に。あんなにも簡単に、一瞬で……。

レキシモンが表情を曇らせる。全てが終わった、そう言わんばかりの顔で空中に静止。ただ地面へと視線を向けているだけ……いや。

「サウザンドピーク！」

アンキロモンの体の周りを、何かが通り過ぎた。

それも一度ではない。瞬間的に何度も通り過ぎ、それが一発一発アンキロモンに攻撃を加えている。

微細ながらダメージを確認。硬い装甲でもアンキロモンにとっては「皮膚」。痛みを伴うと苦しくなると言う事か。

そして、その残像の姿をレキシモンははっきりと捉えた。

ベックモンと呼ばれる成熟期デジモンである。かつてデジタルワールドと人間界の危機を救った英雄の一体。そのパートナーは、つまり……。

「聞こえるかレキシモン！ 洸は無事だ！」

声の方へとレキシモンが視線を向ける。イクトが上空を見上げていた。中学校の制服などところを見ると、授業終了後にこちらに来たか。この状況を伝える事が出来たのは作戦部か？ いや、確認してから到着するまでが早すぎる。では、誰が？

——洸か。

レキシモンは軽く微笑み、ペックモンの背中に乗った洸を見る。無茶な事をするが、あの行動もイクトを確認してから行った事かもしれない。

そして、タイムリーな登場だった、ペックモン。奴の装甲に打ち勝つには一人でも多くの力が必要だ。

イクトが叫ぶ。

「ペックモン、再会を祝うのは後だ。行くぞ！」

「承知」

素早い動きで敵を翻弄しつつ、アンキロモンへと苦無羽くなしばねを突き刺していく。それも、装甲と装甲の間への確に。太く強く形成されるレキシモンのティアーアローでは出来ない芸当だった。

アンキロモンはその重い図体からか、避けようというそぶりは見せるものの間に合わない。確実に苦無羽を打ち込まれ、悶え苦しんでいる。

レキシモンが、弱く脆くなった装甲の一つへ拳を打ち込んだ。確かな感触、効いている。

やれる。

まだ微小かもしれないが、一人で戦っている時よりも確実な手応え。

「反撃、開始だ！」

続く

ep・11：第三話（3 / 4）「長期戦と攻防」（前書き）

第三話

それぞれの力で… 装甲獣アンキロモン！

ep.11：第三話（3 / 4）「長期戦と攻防」

オペレーターという職に帰ってきてから早二週間弱。

昔の感覚を徐々に取り戻してきた事を自己満足的に感心していた
黒崎美樹は、欠伸を噛み殺しながら画面を見つめていた。

旧DATSの時と違い、設備の大半は整っていない。元々、DATSの時とは準備期間が違い過ぎる。薩摩隊長がデジタルワールドへと視察に向かったあの時から計画されていた、DATSのような長いスパンのものではない。二週間で準備など出来ようもないのだ。現れたデジモンの反応はルナモンやガオモンが感知、それをインカムの無線で各人へと伝える。単純な作業だった。

それに、今日は朝から待機している。朝方にデジモンが現れたせいで強制集合が掛かったのだ。もともと、一日にそう何度もデジモンが現れる事はなく、今までの経験から言えば次は二、三日してからだろうと思っていた……のだが。

本部内に響いてきたのは通信。イクトからのものだった。

「はい、こちら作戦本部」

『こちらイクト！ さっき洸から連絡があつて、高校にデジモンが

……！』

「！」

今までに連続した出現例は確認していない。DATS時代ですら相当稀なことだった……何か特殊で不可解な感覚。違和感。

が、驚いている場合ではない。黒崎は急いで思考を転換する。後ろへ振り返り、視線を送る。

「トーマ、淑乃、聞いたわね！」

二人の頷く姿を確認、すぐに画面へ視線を戻す。

「イクトはどうするの!？」

『急いで来いって言ってたから、とりあえず高校に。……ん？ あ

!？ ファ、ファルコ——』

通信途絶。

突然の途切れ方に若干の疑問が残るが、とりあえず隊長にも連絡せねばならない。

黒崎は通信回線を起動しながら、二人にもう一度視線を向ける。

トーマと淑乃は既に駆けだした。

洸とイクトの合流より、五分ほど前の事である。

SAVERS 第三話（3 / 4）

長期戦と攻防

爆音。アンキロモンのテイルハンマーが瓦礫と化した校舎に炸裂したのだ。

生徒の大半は避難しているが、それでも幾度となく破壊された校舎は見るも無残なものである。

ペックモンが攪乱し、牽制し、レクスモンが強力な一撃を加える。何度も何度も攻撃を繰り返して確かなダメージを得ている。間違いなく喰らっている……はずなのだが。

「グアアアッ！」

敵から疲れなど微塵も感じない。

猛々しい雄たけびと共にアンキロモンが跳びあがった。

「何だ……！？」

もちろん、重力に逆らって浮いたりする事はない。その勢いのまま、今度は降下する。

……それが目的の技なのか。

レキシモンがその思惑に気がついた時、既にアンキロモンは地面へと着地していた。

今までにない力強い揺れが地面を動かし、大地が次々にひび割れていく。アンキロモンを中心としたクレーターが生まれ、避難している生徒の方からも悲鳴があがる。

——メガトンブレス。

アンキロモンのその巨体から生み出される破壊力抜群ののしかかり。

「レキシモン、このまま消耗戦しかないのか！？」

洸が叫んだ。揺れに耐えきれなかったようで地面に尻餅をついている。考えるまでもなく、このままでは被害は拡大の一方だ。何か強力な一撃がなければ、とても勝てる状況でもない。

戦力の拡大、増強。それが最優先事項なのは明らかだった。

「トーマ、ガオモン……せめて彼らの協力を得なければ」

デジタルワールドから幾度となくこちらへと攻撃を加えてくる敵達。

一度は閉ざされたゲートに、何かがあったのだ。そして、二つの境界が再び静かに崩壊を始めている。

成熟期一体に此処まで苦戦しているようでは、これからも危険が続くに違いない。

やはり、洸の中に眠る力を半ば強引にでも――。

。

「苦戦している……思惑通り？」

唯一崩壊せずにその形を保っている校舎の端に、人影があつた。

恐らく少女だろう。この高校の制服を着こみ、無表情と表現するしかないほどに何もない瞳で戦闘を見つめ続けている。

一般人にしては妙に冷静すぎる。誰しもがそう思えるほどに冷静な瞳で。

そして、彼女は再び呟く。

「出現位置が悪く、標的の命が危険に曝されます。今後の出現の際に改善のほどを」

周りには誰もいない。

少女はただ一人で『会話』している。

「いえ、覚醒はしていません。……違います、月の女神側に躊躇があるようです」

視線がレキシモンと洸を追う。

……頭が重い。

彼は使い方を分かっていない、我々にとって不足している、デジタルモンスターには必要なのに、だって、力は彼にしかない、それを、私が、嫌、イヤ、いやいやいやいやっ！

少女は頭を抱えて静かにその場にしゃがみ込んだ。何かが彼女を内部から圧迫するように。

……私は私じゃナイんだカラ。

……私は『器』。私ノ『意識』は向コウにある。

……此処に私はイナイ。

「デジモンと人間。互いの平和のために必要な犠牲……」

そうだ。

冷酷なままでいい。

あとは意識の私がなんとかしてくれる。

私の目的は観察なのだから。

。

トーマと淑乃が発してから幾分かが経過している。

高校の場所は見当がついていたものの、逃げ出した生徒の波はパトカーを知らぬ顔で抑え込んでいた。はっきり言えば、邪魔をしているのである。

二人ともが険しい顔で視線を生徒達に向けていた。

無言。

カーステレオすらついていない静かな車内で、互いに何かを言ううとしている。

それを先に察したのはトーマだった。心なしか怒気の籠った声で淑乃に声をかける。

「何か、言いたい事があるんじゃないですか？」

その怒気は直接淑乃に向けられたものではなかった。

長年付き合ってきた淑乃にとって、その怒りの矢先は理解しているつもりだった。彼はこう言う時、自らの自慢すべき知能を責めるマサルと出会った頃は自分の非を認めなかったが、今は時々そういった怒りを隠している。

だから、淑乃もそれを責めるだろう。彼の中ではそう考えているに違いない。男の人はいつまで経っても子供だなど、内心疲れた笑みを零しながら。

「確かに、あのデジソウルに関する知識は本人に報告すべきだったかもね」

「彼さえ自覚していれば、発動は出来たのかも知れない。だけど、僕はそれをしなかった。洸自身が自然に発動できる日まで待とうとしたんです」

「それが間違っていたかどうかは分からないわ」

「いえ、間違っていたんです。結果として彼は敵に狙われ、自らの『日常での居場所』を失いかけている」

日常での、居場所。

名家ノルシュタイン家で恥じるべき混血、日本人とのハーフとして生まれた彼。

そして、父に捨てられた母。その『日常』が死という条件で崩壊する。

自分と母を捨てた父に再び拾われた彼は少しずつ天才として発芽していくが、その一方で妹「リリーナ」やボクシングの世界を見、

家へ籠りがちになる。

崩壊した日常へ、帰れなかった存在。

そのままガオモンと出会い、真の天才となった事で彼は日常から切り離された。

「日常って確かに大事ね。……でも」

二人の姉が天才肌のピアニストで、本来ならその腕を持っているはずだった。

けれど、何も出来なかった。姉が出来るのなら、自分も出来る。そうやって押しつけられた道。

失敗して帰れなくなった、彼女の家族との『日常』。親から少しずつ遠ざかり、ララモンと過ごした日々。

崩壊していく日常、帰りたいとすら思えなかった時間。

けれど、親とは何の事もない会話で解決した。そこに新しい『日常』は生まれた。

「それって、悪い事かしら？」

淑乃は、トーマを見つめて微笑んだ。

意外そうな顔で淑乃を見つめるトーマ。

「だって、トーマは日常を失った代わりにガオモンと新しい日々を掴みとったじゃない？」

「新しい、日々……」

忘れていたわけではない。

ただ、それが洩にとって正しい事なのかはトーマには分からなかった。

けれど、自分は後悔したか？

……否。

「道、開きましたね」

気がつけば、目の前の道から生徒はいなくなっていた。

そして、トーマは淑乃よりも向こう、窓の外を見て笑みを零した。

「淑乃さんの戦う道も、開けたようです」
「？」

淑乃は、トーマの視線のままに振り返る。
窓の外で、それは微笑んでいた。

「ラ、ララモン！？」

○

思案するが、特に名案は思いつかない。

イクトは焦りの表情で辺りを見回す。まだ、トーマや淑乃の到着は確認できなかった。

このままではいずれやられる。やつの巨体は、少しの消耗で勢いを衰えさせたりはしない。

けれど、だからどうすると言った話でもなかった。その最悪の展開を打開するだけの力がこちらにはない。

ガオモンが到着すれば、ガオガモンも加勢して勝てるだろうか？
分らない。

レキスモンには水の矢、ペックモンには苦無羽、ガオガモンには竜巻を吐きだすという技がある。

水、小さな鉄、風……。足りない、強力な一撃が足りない。

マサルとアグモンだったら、火炎という分かりやすい破壊力がある、それに頼っていた頃もある。だが、今期待するわけにはいかないのは分かっている。

ララモンならどうだ。サンフラウモンのサンシャインビームは、今のこの晴れ渡った空の下で絶大な力を誇る、こちらも強力な一撃だ。もちろん、こちらも今の登場を期待出来ない事は確かだが……。劣勢を覆すためには、誰か加勢が必要なのだ。あの装甲は同じ成熟期では破壊する事など出来ない。

「やっぱり、デジソウルを引き出す！」

イクトは決心し直した。

先ほどは上手く発動しなかったが、あのサラマンダモンとの戦いの時は確かに『完全体へ進化させるための量』のデジソウルを発動させる事には成功したはずだ。ならば、きっと出来る。完全体に、賭けるしかない。

「デジソウル……ッ！」

デジヴァイスバーストを構え、静かに息を吐きだす。

大丈夫だ、きっと出来る。

「フル、チャージ！」

イクトの体に浮かび出したデジソウルが、輝きを増す。

そしてその紫の光が、デジヴァイスの中へと凝縮されて飛び込んで……いかなかった。

目に見えて輝いていたデジソウルはデジヴァイスを避けるように辺りに拡散し、蒸発するように消えていった。

「駄目、なのか……」

不自然な消え方に疑問を持ちましたが、それよりも自分への失望のほうが大きかった。

この状況を打開するキーになる事は出来なかった。やはり、何かが欠けてしまったのか。自分の中にあつたはずの何かが。

イクトが視線を戦闘へと戻す、アンキロモンの周りを攪乱するよう
に走りまわるペックモン。水激の矢を形成し、撃ちだすレキスモ
ン。

確かにダメージはあるはずなのだ。それなのに……。

「お願いだ。戦いを止めろ……！ もうこれ以上、これ以上は！」

イクトが、叫ぶ。

「やめてくれえええええ！」

その瞬間だった。

「スパイラルブロー！」

技を叫ぶ声と共に、巨大な竜巻がアンキロモンを襲った。

直接的なダメージよりも、視界を奪う役割を果たしたように見える。アンキロモンは振り払うような動作をして、もがいていた。

そこに、更なる追撃。

「サンシャインビーム！」

太陽光のように輝く光が、アンキロモンを捉え、直撃した。
今度ははっきりとした爆発。

「この技……まさか！」

イクトが、技の発射された方向へと視線を向ける。

ガオガモンの背中に乗ったトーマと、空中を舞う巨大なサンフラ
ワー……サンフラウモンの手に乗った淑乃の姿。

それは先ほどまで待ち焦がれていた、最愛の仲間達の姿だった。

「レキシモン、あれは！」

その姿を確認した洸も叫ぶ。無論、レキシモンのその姿を確認して
いた。

「どうやら、新たな仲間もいるようだ」

その頼もしさに安堵しつつ、レキシモンは最後の気合いを持って
アンキロモンを睨みつける。

もはや怖いものなしだ。これ以上力の温存はいらないだろう。
四対一。結果は見えている。

「決着をつけさせてもらうぞ、アンキロモン」

続く

ep・12：第三話（4 / 4）「協力と疑惑」（前書き）

第三話

それぞれの力で… 装甲獣アンキロモン！

ep.12:第三話(4/4)「協力と疑惑」

デジタルワールドへと落ちたデジモン達が、デジタマに還っている。

……分かれている、彼らの命を無駄にしたりはしない。

だからこそ、戸長谷洸を何としてでも覚醒後に捕えなければならぬ。

覚醒を待つには少し長い。月の女神が躊躇しているから？

「無限へのデジソウル……可能性」

それは全ての証明。

それは全ての節理。

彼さえその力を自覚していれば、私は此処まで不完全な存在ではなかったはず。

私が『器』と『意識』に別れなければならなかったのは、すべて彼のせいなのだから。

十五年前。

あの飛行機の中で、私の『日常』は崩壊した。

当時のデジモン達は、ほとんど人間の姿を見た事がなかった。

そんな時、彼らは『デジソウル』という存在を知り、それを人間が持っている事を知る。

そして、現実世界で特殊なデジソウルを持つ存在を見つけたのだ。それが無限への可能性であり——戸長谷洸だった。

けれど、彼らはその戸長谷洸がどのような存在なのか分からなかった。

現実世界からデータとして流れてきた情報から、彼らは推測を始める。

写真などの詳細なものではなく、記載されているのは名前とセイベ

ツとネンレイだけだった。

それでも、数字という概念は存在したためにそのデータから「三歳」という数字だけに着目した。数字の中でも比較的前半の数である。彼らは自分たちの「レベル」と同義であると仮定した。レベル？——成長期レベル相当。目標は「『ネンレイ』というレベルの低い者」だと判断する。

男女の区別のないデジモン達はあの日、飛行機にやってきて……私を見つけた。

幼く力のない私を捕まえるのは簡単だった。デジモン達は私を連れて、デジタルワールドへの帰還を果たしたのだ。

けれど、当時不安定だったデジタルゲートは「異物」である私を拒絶し、その体を送り返してきた。

連れていかれた私と、この世界に残った私。二つの自分が違う世界に取り残された。

同じ存在で、互いにコンタクトする事もできる。便利な存在になったのかもしれない。しかしそれは、もう別の個体でしかなかった。感情を失ったはずの『器』である私は、現実世界で自我を形成してしまった。

同時に『意識』である私は、孤独の中で自我を失っていった。

私達は逆転してしまった。

意識も体も持たず、疑似再生のホログラムで『奴ら』の言いなりになっている意識の私。

意識と体を持ち、この世界で生きていく事に不自由しなくなった器の私。

どちらが誰？

分からない。

「頭が……痛い」

考えれば考えるほど、私の体は考えるなと伝えてくる。

今日はひどく疲れた。

いや、もうずっと疲れがとれない。

この世界は何も知らずに、私を見捨てていく。

こんな世界ならば、いつそ居なくなってしまうたい。

私に、戻りたい。

S A V E R S - A f t e r -

e p . 1 2

協力と疑惑

アンキロモンが咆哮とともにテイルハンマーを振り回す。

先ほどから何度も同じ行動は見てきたが、ついに容赦がなくなってきた感じた。

何もない地面すらも何度も叩き、叫び、先ほどまで抑えていた理性すら取り払って暴れたい放題暴れているようにも見える。この状況は、正直言つと戦闘で「勝利」しても結果論としては「敗北」に近いのかも知れない。

とはいえ、戦力は十分である。レキスモンは不敵な笑みでアンキロモンへ視線を向けると

「終わらせてやろう」

静かに宣言した。

その声に呼応するかのように、それぞれが動き出す。

「ガオガモン、接近戦ではダメージは与えられない。攻撃はスパイ

ラルブローを中心で行う」

「イエス、マスター」

最初に動いたのはガオガモンだった。トーマの命令を聞き、走り出す。

アンキロモンからある程度距離をとり、なおかつスパイラルブローを確実に当てられる位置へ。

移動は迅速だった、すぐさま方向転換。瓦礫を盾にしつつ敵を睨みつける。

「ペックモン、苦無羽を！」

「御意」

ペックモンが飛翔、アンキロモンから視線を外さないように空中で停止。

飛翔した距離にアンキロモンは向かってこれない。それでいて、確実に敵を狙える上空。

苦無羽を構え、他のタイミングを見計らう。

「サンフラウモン！ あなたの一撃が決め手になるわ」

「分かってるわ、淑乃。早く終わらせて再会を喜びましょう！」

サンフラウモンが光をその顔へと溜めこんでいく。

少しずつ輝きを増すそれは、光を集める事で威力を増す強力な「サンシャインビーム太陽光の熱線」。先ほどの牽制とは違う、確実に敵を倒すための吸収だ。

そんな各人の動きを見ていた洸は、気の抜けたような声で呟く。

「みんな、凄いな……」

空中でその言葉を聞きとったレキスモンは、余裕をもった声で答える。

「当然、戦闘経験も豊富だろうからな。……だが、我々も最善を尽くすに違いはない」

「もちろんだが……」

言葉は自信なさげ。にも関わらず、洸のデジソウルは覚醒のための力を高めていた。

その力は、使えば完全体にも近づける。

無自覚でそこまで引き出すとは。やはりあのデジソウルこそが鍵。レキスモンはゆっくり丁寧な構えでティアアローを準備。

さらに、最大出力だと言わんばかりに背中の中を鞭を輝かせる。

深呼吸。吸い込んだ息が少しずつ体を巡り、精神の高ぶりを抑えながら確実に力を放出する。彼女のティアアローが特殊な条件下でのみ許された、真の姿。

契約者のデジソウルが完全体に限りなく近く高まった時に、水流が固まり始める現象。

——まさかこれほど早く、これが使えるようになるとは。

「蒼き万象よ。主の力の元にその姿を解き放て」

言葉を、紡ぐ。

「これが真の威力だ……ティアアロー！」

その瞬間、全ては放たれた。

ガオガモンが放つスパイラルブローがアンキロモンの身動きすらも封じ込める風圧で圧迫。勢いのままに辺りに強風が巻き起こる。

その風に荒れ狂うように、苦無羽が予測不能な動きでアンキロモ

ンへと突き刺さってく。一発も外す事もなく、乱れていても的確に。そして、氷へと固まったティアアローが打ち出され、勢いのままにアンキロモンへと激突。少しずつ敵の装甲を貫いていく。

最後に、サンフラウモンのサンシャインビームが何もかもを焼き払う虹色の光を見せ、戦闘とは思えないほどの美しい眩しさをまき散らす。

爆発。

目の前が光で溢れ、その神々しいばかりの輝きに思わず目を伏せる。

荒れ狂う風が辺りに拡散し、突風を生み出していく。轟音と共に地面が揺れ、やがてゆっくりとその音が弱まっていく。

洸が次に瞳を開いた時、その場所に先ほどまでの凶悪な装甲獣はいなくなっていた。

「やった、のか……？」

あまりにも激しい力に、実感すらなかった。

どうやら終わったらしい。デジタマがトーマに回収されているのを確認して、洸はその場に脱力した。

妙に青い空が、戦いの終幕を彩っている。

○

「おかえり、ララモン」

「淑乃……」

何処から流しているのか分からない涙が、ララモンからこぼれている。

二人の感動の再会をじろじろと眺めるつもりもないので、洸は視線をそらした。

が、その先にはイクトとファルコモンの姿が。

「ファルコモン！」

「イクトー！」

こちらはこちらで、入ってはいけない雰囲気を醸し出している。

「こういう関係も中々に美しいではないか」

「……お前が言っていると本気に聞こえないんだが」

ルナモンはそんな二組の光景を眺める事はなく、どちらかと言うと何処も見えていない感じで視線を彷徨わせていた。

洸から見れば、その意図など掴めるはずもない。

ルナモンは悩んでいたのだ。『無限のデジソウル』を伝えるべきか否か。

伝えれば、狙われている理由もはっきりするだろう。彼にとって今後の用心は必要なことなのは間違いない。

けれど、伝えれば彼は傷つくだろう。この場所で起きたこの惨劇は、彼自身のせいなのだから。

此処で言わなければ、ショックは大きくなるだろうか。彼にとって最善な策を、ルナモンは導けない。

そもそも、自分の目的は――

「ルナモン？」

洸に声をかけられて、ルナモンは我に返った。

かなり思案顔で固まっていたらしい、周りは撤収準備にかかっている。

「いや、何でもなし。私を誰だと思っている……帰るぞ」

「？ あ、ああ……」

まだ、いいだろう。

彼女にしては珍しく、事を先送りにして置いておく事にした。

。

デジモンと人間の共存。

大門英博士が憧れ、子供達に意志が継がれ、デジモンと関わる誰もが望み続ける世界。

メルクリモンを筆頭とするオリンポス十二神達もこの理念には賛成していた。

だが、十二神——特に限定すれば『太陽の神』には抱えているものがある。

人が意志と器に分離する……？ そんな馬鹿な話があるはずがない。

しかし、その人間はデジモンに心も体も傷つけられた。

そして、デジモン達も人間達の無謀な侵攻によって傷ついていった。

どちらが何だというわけではない。きっとどちらも間違っていて、どちらも正しいのだ。

だからこそ。

こんな互い違いの生物同士が、共存できるとは思えない。思えなかった。

それは人の世に、共存を望む者達が多くいる事を知らなかったかなのかもしれない。

デジモンと人間の共存。

人と関わりはじめた今なら、別の答えが出せる。

共存世界の実現に大きな時間はかからないのかもしれないと、そう思えた。

互いが少しでも歩み寄れば、関係は成立するかもしれないとにも関わらず。

当のデジモン側は、少しずつだが確実に侵攻を始めている。

人の世を襲い、暴れ、理性すら捨ててしまう。

何故？

「デジモン側に、人間との共存を望まない者の暗躍がある……？」

最終的に、そこに結論は達する。

世界は複雑すぎる、関係の修復にはまだまだ時間がかかるのか。

「これが、お前の望むデジモンと人間の形なのか？」

……アポロモン。

間違っているのは、お前かもしれないぞ。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4262f/>

SAVERS

2010年10月12日01時12分発行